枕草紙

上巻

光榮記念

摩書類從卷第四百七十九上

雜部三十四

檢校保己一集

枕草紙　清少納言

春はあけぼのやうやくしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて
むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる
夏は夕つかた月のころはさらなり闇もなほほたるの
飛ちがひたるも又さらなり雨などふるもをかし

うらびさうてゆくもとをかすし
雨のこゑやうり弟りさくこうかすし　あれ
秋ハ夕暮夕日のさしてやらにさして山の系ちう
月ことにうたうたうの秋よゆくとて三位二ハ
ちゆくもあくれなり海ハて广のかすく秋風
ら秋さそふことちいさくうとかすしいう
そそ〻秋風のことせしの声とつて人色よさも
あしく秋くさし
さそつて色のあり方さにもいさ
のことさろさも又さ秋とやさ世さよ大ハと

いそよかすして歳ありてをなすとそ
いとはさくしたなりあれいやりくやひも
てゆよて雪もさ世ひつ大ハけの大もさろさ
さひうよなりあれハうろし　うろハ
正月　三四月　五月　七八月　九十月　十一月　すて
月ふかりくはせ弟つていとおし　せちハ　五月五日
七月七日　九月九日　ものあれ　ものあれ
雪さていまこ月の雪の夕はうさうあ雨の
夕日ははさくさくとあくやさなるのさのあやめ
はすくうかりつ弟のこうりあひく

いと物すごし　風さへ　あらし　木うゝし　二三月の
うゝの夕つかたゆく春を行く春　八月の
夕のあはれまさりて　ひぐらしの鳴くこゑ　虫の
聲さへ　川ぞひ　木の葉さへ　梅さへ　桜
さへ　ちりぬるもこゝろ　ものいとかなしく　梅さへ
ちりぬる　桜さへ　ちりぬる　木の葉の色いとこゝろ
ぶかく　枝かはさまでこゝろ　ぶかく　咲　さへ
咲　さへ　あらの　さへ　ひたすらに　こゝろ　咲　さへ
いとかなしうめでたし　正月つゝもり　五月　八月
ちりぬる　木の葉の色いとこゝろ　あはれ　さへ　こゝろ
いとこゝろぶかくちりぬる　雨うち　ふる　時　さへ

なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ
なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ　なほ

くれなゐのなかるるもあるやまがはんと思ひ
そめをあてはれいかなひのときにはかりそふぬれて
うつせみとなりにけるかれ揚屋死の清門の清作
うしのあひくなりぬるのわかれのあとにてくる
梨花一枝春帶雨とうひくるのかなうまかりし
ゆかりにはかりのなかりはかりそそ桐の
花のひくるふ咲きるはかりふ城茶ひろ
うわるはかりうしてくらうたれとと来
まふひくうのをあんを絡くまく
とくしふたおんとうのれうもす

ひんぷくとなりてふはくうてはかりなる
なるとものはそくるはれうもはつまるを
ふるやあるみまのをあるうにくれるもあるちの
いとおうしうとまのをうそすてうれまはを
てうなをを五月五日あるはいとはかり
花の来なるぬ　五葉　うう　柳　杭楼　るはの来
きるふよんはしくれとくれの来ともうくそ
をしまをくをみうにあるうをるはもわんて
をりみられはやをくはかりひかけとあるを
葉のあるよりはしかりはうしまめと

ちの花　見しはなかりしかはめはるるこの花のかをと
ぬとかうしきさしいろうほれ神のいにかの物とれ
ひくしをやむもとうるきてさきこ　橘未ハこ
ろにかけるうるかもこれまらひてさきまかろ
かろしかるやもなりとうと毎一章ルとちを
よりもれく立ちとう人のきをしよいこれをる
うきれいうあれをこのひくをかをれ
もまかうし　ひの未ハかもうらもとこのハ
ちこのうのうにうにもこれこうハうとかの
よりをかうし五月花六月の声城をれうんもあ

それなり　ようその木ちこうやたのもそうこうハ
すをかかなしうこうの人ひろこのをうれ
もいとうなかかふ雲しなのうれつぶうたこく
かうし　あすくひの未ハこの世ちくもうとて
こさうこ雲こうかにうりて返ちる人をもて
うをうる校さしたと神あれこくかまあしし
それとなふの四ちくあとうひの木とはあく雲
あちをなかをうこうなりやをれうその色ち
にうと思ふうこうの面ほうこうかうし　秋ちあち
の未ハとくしこう人をもくなふはうこうあし

物とものいとしうこゝろふかうさうなりこゝ
ろもち　あふぎちらの木　櫻たちの木　とうるの木
うぢくさ木いろれもあるべし　紙うれしもそうへをね
ゑしふいろれさるたうし　たうしとうしもの
こゝやさ木の中ともいとこゝ葉と紙うて二位三位内
うへのさぶらひもうるはしう葉紙ふふ人の見る
めれはうしさるよさういはゆるもあるべ孫と雲
の帝のおきさきたちもうれてとさの紙の
見とものいはものうへおくしまる世佐ゝく人ゝ
よみさるおうちとはものいとしあられなり
以事よはゆ帝てをはしあられもはうし
ともこゝさ世さうる物さ葉も本もとの世しもお
ろうふこゝろおはしよ　ゆうる紙ものいこゝはゆ
ゆうなさ帝さやさ帝さうる葉さうはゆ紙くさよ
帝なるふ見ひう帝ゆ中ゆうるくもあるぬさ
のあうこゝさうくしこゝうるこゝさうはゆし
帝れとおうこゝうれたうるその用こゝはいつゆみぬ
ものこゝうるものはこゝうるものこはゆ紙さなゆ人の
こゝひ物ものこゝ紙見こゝうはゆくれはなこゝたゝ人をゝ
なくいこゝひのはうこゝうゝ紙のこゝうゝもしこゝて

はらひさあるはいかなるたゝよみちせむせやと云ひ
ふるきもそのもし　かし是木いとおかし　紫のさま
ちいささおかしき物さかりの稗の花のおかしきまする
んもかしこしまさる兵衛督すなみそかなる花もさ（尉）
いかいとおかし　すこしなりあれとまろの木か
らなんこそさても家のくしらさす（具）　なにとなる
れとやうきとつきなはかれそちていとおかし
葉の風は　なをしこのかみのはさしやまともいとおかし
とみなくし　三種　朔の花　ふるきや　こまく　はは
すゝ見　男まさんは殺さし　なきとそむつかしきを

れとこと花のみなし（霜）もられかなるかいとなれぬ
まするみあひまくはしいそみるいとおかし　又
見さとしうきみそくめみす夏草にあらぬはきな
れとかきはかの花らこそけなり名こうそあるか
見のくるかふとそ文字みらか紀なる　かむひの花
きはこらく糸と春らの風にいとよくにそ春秋と二
とひさくいとおかし　又かかの花の葉も秋ゝ
初よにそいひは葉らるもおかしうぬ色さと
のすゝきそにくきや男花は色かいとくらおかし
花れたとき　さきこれひいそあるおる波さたまと

いふものゝやくそくにあれとなほ夕ぐれ
とゝなのはをうゑん家門
花あしの花　これをすゑ紙にかきぬいとあはし
と人いふを秋のゝとしなへさるの初しをゝ
すゝきうあれすゑのいとくすゝきてあを
きりをぬれくうちなひきをるいけくりの物や
いあるをれと秋のくそういとみとろなをきくを
みくれをさをしじ花のゝもみをゝとろなを
ちうをうを後をのすゑまてのしらのをろくれは
とれををも志ゝをすゝし　蘇枋

ちりひくうををるをゝくにくれををある
四ありてあやゝうをてうれをもうあくれとゝふへ
ゝくれとゝいをゝ
花をなをゝ芳　をゝ　こも　あをひゝて初しまを
をのれりふ神世をうしてけるかをとをりを
をりくゝ花ものけをもゝ初しゝ　れをを
八四あゝををしををゝ思ふをのゝて初しをゝ
をくり　ひるひろ　をもを　こをに　ゆを　を
まををを　をゝみあやのをんをあるれる
し　あやをくををゝしのををひゝ紙くれを

けふきのもしあなうくれすり　うまて　まい
りるふかつん　又　いとくれうあくれすりこさしの
ゆくひとりもいますすうしうたれやすんうまと
のいつくしひあうさ　ゆうい　ほとけすやあむ
とかつ　こういとうろれ　ことなし　まいかなふす
とみすやあむと　ふうこうとおうしまれ
きのふまいとあくれ　又ちうい　はくなし　も
ほかもいつ　ゆうすけ　ひあ井　くあ
ゆへ　くと　さ　あ　ほつら　ふりな　なを
あくほいとかつ　くらすいようつの　まくらも

世ますくれうめて　さし　妙法蓮華経のさとひ
うくも　ほとけ　仏よ　さそ　まつ　日　多い　すま　数珠　つ　めさ
会佛して　は生極　乐の　え　毎　と　すれ　くよ　ま　こ　ま
たまくら　ろ　又　てう　なう　池の　水　よ　くれ　な　井　よ　咲　を
ろも　て　かつ　ほ　れい　華　扇　紅　も　ほ　よ　はく　う　ま
よう　う　ひ　あ　ひの　日　れの　ま　よ　ほ　て　う　こ　ひ　て　う　こ
あ　く　う　う　草　米　う　毎　う　も　あ　く　ぬ　心　な　れ
さ　し　も　草　屋　へ　む　く　う　はく　さ　草　い　う　はく　う　ひ　や
と　な　う　う　う　て　あ　る　鳥　い　ひ　の　う　う　な　れ　と
あ　へ　む　い　と　かつ　一　人　の　い　つ　む　事　ほ　ま　の　ま　ん　と

ほとゝきすいてゆくそうし くもゐ きゝし こゝや
こゝろ ひは ひさしこゝろ 山よりはなほらひく
なくはうかゝ絶みなくなさけんらぬ心さへあく
れな礼ぞに残魚そてきゝんほとも心くらし
はるはみゆるもなるしかすかなほのさにうらなれ
さ海なれとさらにくなく夜の雲井はこゝ
まなるほと思ひやられいとをかし からに
あはさゝすゑ いかはかのおとり くみより
かくちよりもまさくすんいとあはれなり
さこさきりんめ見さくらしうまかこ井なとものす

ろし君はよるはおりふたなかれとゆるなかのこゑを
にほひの音絶しとあらそ細んに心をすくかゝさ
一かの夜はちるをらりもれと秋もらなくて露の
ゆきえまふほのうにさくはなかきるいとをかし
又冬のいとさ雪ふ夜なと雲井よなまなる
まさねの霜さら細んほと思ひやられそいと
をかし 管はさ海さらよりさしゐんらくしう
さし絶えてきたよういてきる声なとはさりうらり
あてまめてさきほとわかる夜秋のすゑなく
ありて志らるまなくてきつるものうらまする

ぬとうてとうよ人のさみんあるとうひ
しもあるしと思ひしに十年くらのはつひ
くゆしにさてさてさるをたせさるをを
やもちうこうはいもてくかひぬ色よ桜の
くゆりなめうしまてこさやいあやし
よ家のえてこうたりよ梅の木なとうはいてこる
やうこうたさこそうやうたらわもてい
こさうたれ紀貫之　ほとこたいあさ海うよ
うれ　ていうこうようたいてくそうこい
へうこうさうたうめそうあれ六月おとふそや

そおとをすうしうれもすえんなとものやうこく
のこあるふうくひあるもさしもうくをはは
うこうし春のうこうそとしそれかあるあし
さうもれうこうくるのたれいすこしいとふ
うこうこのあるもうくくうあうもはゆるを
りくくもくもなくせのはへあたうくう
もたりうえてこうこうとうこうしうやいするうの
たうあるこうひうこあたのこれいみくいて
くくうれいたれあこふいこしうたく
れたうあれたほとうくうこうたれ思ゆ

ぬ四位とる也　おりてみたものの口こそあるなれと
にはとりのなのちいさき袖こうあされなる也
むしは　すみむし　こさりくと
さくさくてふ　日ぐれ　日くれ　ほたる
日とむしこうむしいとあくれたるおそれうみ
ふれいおやはにくき見もやおろかろしよ心あるむ
とくおやのあやしよ衣を日ぐく袴てい
男親
秋のせちやうんおりうくうむとするまくくと
いひとくきあいよきある袋さもさくとくとと
て限れを袋こくしうまてを身をうくなれ

そらくくとくるなるあやくくてあくれな
日　ぬるほをむしまくあくれなりはるん紙
よる心をくくてはをさあくくらんよ思ひを
うあにくくを紀をくくんなたにほをくくあ
里紀くるくくおくくあれ　夏むしてくら
をくあおくおくちくくくをて物くくなな
とみくくはくしのくくくひあくくを見て
くくなひておくく　あくいくくれと分ある
ろくくてあのくふをくあくくくおくし
あれ　山は　をくくやと　みくをと山　ふく

花山　ゆうさるの山　ゆきあれ山　かすさう山
さるれとふかさやまふとおくれ　いはくら
山　うぐるま山　のらせやま　まゆみ山　かさ
とう山　ひしの山　とこの山　さるとなるみな
とれたるのよ海せ　おくるおくり　いつき
の山　あさくら山　ふよろんいとおり
おほ海道山　なしれやもんしのまろ　ひ
いそれくおう　こさの山　ぶちうま山　ゆき
さう山　みなし山　あしの山　葛藤山　くら
ぬ山　ひしなる山　こひのなる山

みれい　ゆうふのうま　あくらのうま　ゆきのう
みな　野いさう　いなひのうこのこま
とあひの　ちめしの　高木　あくはの　むら
さこさ　うぐいす　うぐいのうぐいす　ぶれなと
さくはぶるうあ　くい　なしくく
みのくく　あ　ぶのくく　うのくく　うるひこ原
ちのくく　くきくく　うひつく　なるい　ぶれなる
ちのひのなる　森そ　うへのさの森　いくさの森
うぐ　れの森　いくせのより　おほあくこのより
ぶれうのより　ゆうさくの森　うぐこのより

らひのもり　きのくにの森　こくこのもり　里ハ
なほう発のほく　稲さ発の里　人まのさと　さの
発のさと　ゆへりのさと　ちうの井
の里　ほまもりのさと　人さとられるまやと
とかれて　市みのさと　いくこのさと
むまの原ハ　なしくさのむさや　野ちのむさ
や　せ紀い　あさくさのせ紀　すはのせ紀
くさこのせ紀　きく川のせ紀　はちうのせ紀
らゑものせ紀　なこうのせ紀　さこみのせ紀
よさくしまのせ紀　又ちる発のせ紀　さこ発のせ
紀はちうのなふふあ人なをのおうて紀なり又
よしみくのせさこそそうう見ひえしてあ
ろうこうとさうまゆ　これ紀なうとふふあ
あ発あさたなを紀かく見ひうえされをあさこ
うまひしうう発あ　みさ紀い　さうろう
うえひとの見さ紀　かしうのみさ紀　あゆの
見さうさ　ほうさ紀　さうさはうのさうう
さうすのさうう　こたくうのやうと　ううと海
のやうう　はい　あさんけのうう　なうつ
のくう　あうひうのうう　さまれのうう

みをつくしのはし　うら　みをつくし
ところどころのくし　はのこゑ　ふれそ　三川のうら
かさゝさのくし　やすやすのくし　ゆさあひの
くし　人ゝみわのなれとなれをくらはしをさ
なり　ひとすちわたしをきれをしらせい
なれをおう　海　海　水うみ　ようさのうみ
うえくらの海　ゆせの海　さうのうこと　さまい
うれしま　やうし海　をくれしる　さとうの
しま　まつさのうら　松ゝうら　志海　おくしま
はまさい　うとく海　ゆきあやのくま　あくま

ちひろのくま海　つふひろうんと思ひやりてはしり
うらつくのくま海　浦ハ　志ほう海の浦　なすの
のくま　うるすまのうら　志のこの浦　河ハ
松原井ハ　松ゝハ　みやせ河　あすゝハ
をもはさをたるうらはしまれ　みとうて
なふ事　城さしをさくしをきくしをあむと思海
よはくし　いはをハ　ゆるはをたハ　ゆらハ
かしこあら　ゆなるうらの必ゆみくさをを
はをゆ海　をとはをゆもはくし　なつをれまち
ををれるをなくしへをれなくあと　あと

多のあらそひをしてわかれくるひとなりの
みはけるをぶよ いなまあらかくれのあら 寺田
あら のこるのあら あさい とたなし
のをぶよ あらのをぶ はるのはるんしまれく
しまあをめてをぶ たちのをぶ
ふるものとあるとをぶ あくれたるたり
とろのをぶいるかしあるん
いて田あくるあ田 あるの田 はるの池
ものの田 いけを えのいるはつせを
うてふ水をのひをたるくをぶをつを

しるかしくるをしたり 水たりの池をう
あやしうたるうはるあるんをひしを
五月なをすくあるいをあんをるかく
をのいるよ水をものをなくるをう
うをてるをるをしいあるを水をを
かるくはるをつひしるかをて
のをあくいをいはるかもあるる
をすをるをはるをるををつをしを
し はるをいの池ををうるをの多をるる
ををしめくるをるをいをて

さかれ初そめしみとりの
野辺の若草はるかなる
四つの海をかけもなほ
ハこころとゝまるこの君
あん　ひめもすのいと
なりうとうとうえ事
すこの池　井ハくゝ
ゐ　ゝ　この井なとけ
よなりうゝ色ゝ
しとかゝれかゝる

井　市の井　世尊井　さくら井　ゝさい
まちの井　市の井　さくらのいち　はくちい
やうとふゐ　ゐのうゝ　ゐのなとふとうとふ
うなゝすゝまちゝ　ゝ　ゝ
ゐすやと思ふ心ゝ　ゝ　ゐのいち
ゝまの市　あすかのいち　ゐのいち
ゐゝ　二条あゝう一条もよ　すゝ院
池　ゝのくゝや　すゝの院　ゝゝ
ゝのみと　ゝ色よ　ゐ院　ゝ
ゝ六条　神ハ　松のと　ゐゝ

うとにくれたり　海しまあまをうめてうくおう
まれり　幸よ　葱　さのくれよ　きそでまつよひしの
いとふるものいと　はるくさひさうしまつゆき
う　秋うはあるとよまんこう　思ひそそれく
おうしのうう　かとさう　さうんよう　仏い
　　ぬいうんの人をまこしまつひくは
らうらはまくたまをはつるいあれふかき
しまたう　地さう　かう西いみめうはう
ろしまふおくれたちひいあくれよきの
もきうもいうはまくしうめう

強い　法華強　品い　方便品　やくさうゆ品
世いく品　六のまれいさなう　仁王強の下百
寿命強　きうう　阿弥陀大秀　弥陀　きうに
隨求　すいくきうよ　千手きうに　修法　まほうい　あう
ぐうきうよりむさ百もなあめしうやさし丈
あくのもいとおうし　寺さ　はかさう　つ
やま　うさ紀　あう　あ山いさうほうやの
ぬちうあのたうきるうあくれしなるなう
こうば　粉河　さう　文い　文選　文集
こうむ　集い　万えふ集　古今

物がたりは　きえよう　うつりの色は　殿たち
ちかうまいりたまへる　月まつ女　こよ
のはちひものまうちとくとくとくとく　むもれ木
ちちちちの色　三種は文章　ちちちちあり
月あうひはちちちちのうかみぬかとはよ
法華経は本こん　はを　さるとり孫うし
説　を種のうしはうかよ紀てまるほとふこうとく
うのちちちちもさきめれかちゆりむさぬ
れはうてふもいすはこのあうちなれはあうちを
しと孫しゆちちたちけなるまはちうん紀

きこのことはちむゆちちはうかゆちのか
はみ本うの紀事もようりしるれいてちてなる紀
　　ちのあちさは　あうちのうちはきさ
かうちあ　ちちちうよはちうあもうはぬ
ちちゆむう　ほうの本よむう
ちちちはいうちちうちちさ
ちちちうみ　うちちはいうちちうちちさ
うすあもう　ちはちちちはちはちは
ちちうちはは　ちはうちはは孫うちちう　あは二ある
ちちちうもう
六位ちはは　ちうはちはちはちはちうはちはちはちはく

おとこいらつさふかなふるもこさとれこさねいたろ
きいよりしるなる井のもはるれとたゝしゝ絲よ
いよさる　女のうつさいうしる　ものく
こゝさ　あやのもんい　あつひあれち　おろ地
い　おしさ　ろろぶ　もこさみえてのおろ
枝ろうさるもよし　かつ夜い　冬いあるる
蓑い二ある　秋ろうれる　もそ　おはるる見
うさ見い　ゝしさく　うすやこい　ろろさ
むしぶ　あるさ　うやするゝのあゝさも
よし　すろのこ　うねすさ恋よろと
もんよしゝさるよ　あてい　ゝめこみめも
よし　ろえいまるろなる　くしのくこい
けん絵蜜恋よし　ろる見い宮すあろ　夜のろひい
ろる　みのろひい　まさ恋ろ　うう
くさ　ゝ恋ゝ　あゝいろ　ゝ絲いろ　ろろぶ
よはろう恋もよし　ろる見い　かゝらいくし
ゝきなるちのほゝ　ひらゝもこのわ　横柳毛
くゝふるりる　あゝ絲いくゝらせるほぶゝ
おいそも人のゝ人のゝもの　ゝへゝりなとあとみや
ろほともなくすゝもめ人のはゝるる

うゑみやまるさをれなりつゐんとなかゑうゑれし
まれ　をてこすれいむしさをのすこほをまを
をとをゑをよ　むまを　いとをゑをかをわ
ゑうををすゑ　をれ　むしをめをんほをる
あ　まをすゑ　をゑいのうをゑをれるんをか
いをゑをゑをふゆゑみをもゑをゑを
又ひをゑをきゑをあ　四をゑをれ
うしい　いをゑをゑをはをのををお
のをゑををゑをゑをゑ　れをい　ゑのをゑをゑ
ゑをてをゑをのをゑをゑをゑ　ちをゑをゑ

人をゑをゑをまをよ　はをゑをゑをすの多はやせほを
れををさ人もれをを　をのをゑをほをはやせ　ををを
ゑををれいをゑをゑ　ををゑををゑをれれををゑをんを
ををれををひをゑを　受領すゑをををふをりをを　れゑ
いをゑをゑをみをを　をををををををををををを
ををををををををを　をををををををををををを
ゑをゑをゑをゑをゑ　芽
ゑをゑをゑをゑをゑ　をををををををををををを
をををををををををを　をををををををををををを
をををををををををを　をををををををををををを
をををををををををを　をををををををををををを
をををををををををを　をををををををををををを

あらはれぬるもとのあるじ　あん
ないもなし　すく詠くらべて　まひを　さ
ゝ　叙　ゝくそらそらそなたてゝあまたことなくして　らく
そんあらしてもふをまきりくなをし詠し
うん詠んけ枕頭　ゝはうみをありうをあるをふほをふ心ふ
くきふあつををるまもとをを　をれとかく
の杯の詠あと　わゝ皇慶事　ゝはすをゝしをあれも
あゝれなり　又をあこをるゝまひいを　ゝ
杯ゝろし　こまゝゝもなゝ　ひゝをの
ひ　ひい　ひゝのこと　ゝ風香調　あゝてゝ

しをやうなれもまゝをゝあるを　あん
あゝ紀　すく詠くらべて　まひを　さ
ゝ　叙　ゝくそらそらそなたてゝあまたことなくして　らく
そんあらしてもふをまきりくなをし詠し
うん詠んけ枕頭　ゝはうみをありうをあるをふほをふ心ふ
くきふあつををるまもとをを　をれとかく
の杯の詠あと　わゝ皇慶事　ゝはすをゝしをあれも
あゝれなり　又をあこをるゝまひいを　ゝ
杯ゝろし　こまゝゝもなゝ　ひゝをの
ひ　ひい　ひゝのこと　ゝ風香調　あゝてゝ

わすれさせてう　まうしのいとこう　ろうのい
ろう　うちのうちのこう　ちるのうちひすわ
ちるつるといふうくもいとなのしろ　ちるあ
れん　あはものい　ようとあしていとれしとゆく
ちりきこうあるもちるくみちうもてゆくもい
とれてしちうあるはるいとくとなりゆさく
ちうにきうるさるもすあくれしちあるて
もむさうもするくれしちあるうはいれさるも
なにもあるとはさうれしちあるものいなしま
してきてちうきてしなといりうしめて

きてあるはなるふいつる人のあすれちうきる
まくるのもたちにあるうあるはるけ家ちるも
いあるうちうれしあれ人のようにとうせさる
をしつてやるもさてあみのやうふみう
てうとはあくし　はうの　あるいはるはあ
ねようるまなとふくあぶさるいれしあれ
とところせくもてあつうひくあみうみさる
はうくあくうはやうれいはこあえも
あぶなしみあうしあるはしはしはる
ちまちう秋のやしといいくうはいしなとか

心ばしくうつくしきさまなりしかば
まして日ごろあはざりしかばいとゆゑよしの
のまなびのはまごぼいとけなくものの
うしなはるるとてなみだをながしてあはれ
あふぎをしなとこさきまどひかなしうも
たのもしうもうちまもりたるほどもさすが
にいとうつくしうもあるかな髪
さらばありわびぬべしもとより人を
たづねあくがれにのみこそあるべ
なくおぼしたり　口ばしり口　風吹日のあらし雲　口ばしり
てさるる山ぎはのまことなるとまれるようす
黄きりぎしうつくしきのほどにうつくしきたなびくさまなる
あくれなり　いとあはれなるほどにうつくしき
のやうにきこえたるくなりゆくはしあるる
ふさるいろにやあらふもたるさまなる
ゆふはひぐらし　ちるもあるれいるも　ゆふ
ゆふあくれにうふほのしうなるまにて
いとうつくしうさまなるまにて　夏ハ口ばしりてなほあ
ものさまもかとなるもうちとすさまじうこそ

あつまりそうさなのめたるいとろし　はるさき
左大将　権大納言　権中納言　宰相中将
三位中将　春宮大夫　中宮のもの〳〵す　左
うの中納言　殿上人　権中将　四位の侍従
弁少将　くゝ人の弁　四位かゝ　受領　とらうい
いまのみ　きのうえ　はるのうえ　やまのうえ
権守い　志ものの　うし　志ちこ　あく
やうはうさたゝて　かゝあるゝ
式ゝ大夫　左衛門大夫　やまひこ
むら林　あゝの年　はるいとなく　ゆくとも

なやとゝる　女の家はゝ　ゝさゝこの家
一品宮　御産　家はゝ　あゝ　れゝ　ゝ
家ゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝ
はゝゝ　春　みもの　行幸
とゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
むゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ちゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

くにゆよくもみなそひとつつれぬらし
正月一日　三月三日うらゝかにてりたまへる　五月
あるハやゝそて日てるくもりくらしたる　七月七日
ハたとめく日るそてハくもりて夕かたよりくれ
そ風かくそらに雲わくなりもそてゆふ
たくれのほれハ月いとあかくましてよかる
まふほしのかすさへみなみえたるこそあれ
うしあれ　九月九日ハあかつきかたより雨すこ
しふりて菊の露もこちたくおほひたる
わたなともいたくぬれうつしのかも

ほそくおりしるはれそてハやみたれとそらハ
なほくもりてやゝもせハふりたふれぬへくみえし
たるもをかし　めてたきもの　節会
よしみえてやかてゆふみやのありさまけしきもい
のおりなとにしよせく名をゝかしんなと
しまいるほとにいとめてたし其のころ一の八
のにかゝすかまゝてはつれぬにあり節もみえたまふと
し今上一宮ゐとやしふやむことなきこゆみえたまへ
ちのまゝにうつり　祖父おほいとのすけつゝみあら
まひゐてまつるにおほちハさかなりおほちな

とまりくも見えてまつうちさるる雲の
うつろふめでたきあしたにはれむまひをせてはんし
殿上人うへ人なとめしはつのひあうえをせはす
ほとをなとをうへ人もてまつるふけふうう
まつ月あきらきれ　　きてはあらてんのをと
かつらをと　よくうの発をむしうのてひをと
はるくみをるんは　　かつはをよ　　うをうをう
六位をうへ人いみしをを君をはをとをを
もこをはをあやをうの拍板四よ海の拍子をこをう
うはしををはをれうをふうくをれはをうま

一条院のをとのををはををはををはををはをを
ついはすうのすをする菅八はをうはをるうれのを
をらをすををめを海しをまをみゆをこをもをう
はをれ　又持経ちをやをうを者ををあをれまあをを
しはをうをををはをはををはををはをを又
ををををはををはををはををはををはをを
はをらをうはをうふ井あひををはみをを人を
えををを声やををををるゆをくふををををを
をくをうみをうををををををををををををこ
をはをはゆれ　又身のオあををはをををををを

とゝまるもかろ〳〵しうおもひなしにくけふこゝろもとの事を
はなれらるゝなれもやむことなきはちあるべきはに
こゝなることをせずもしひかとすべきかうはいちはぶ
まいりまゐうしまいてはあまとの師をそこうなはい
をせずといふこゝろなくくらゐ山〜くめてをくく
うかゆれたよ 序表 をこゝちまくをこゝなはく
りいてゝほめうをいことめてをし　ゐをしめ
はをあるもはうたうすてくいをよるも
はうすめてをし　ひろふよをよゆさのた
ゐをありをこゝ　をこうをひうめた

とうはをこゝをれもいるもうをんもむをこゝはを
なるめてをこゝうのなるふいはをこゝうすに
ゐくこゝをれとうれもいろいめてをし　なるあ
ゐはは　ほをやふふこゝをはこゝをんをはを
のなはゐすこゝ　はゐゐなるゐこゝはめるを
とこゝをゐはうえのをなるはをこゝをほこゝろ
ひゐをなるかをみをうゐうこゝをうゐをこゝを
はなをこゝうはをあてをあるをこゝかゐこゝなをゐ
をあかゐんをゐゐくゐなをあるをこゝをるこゝと
をなはををゐ　うをゐやゐ　いまるをこゝをる

外題 藥 五

やたちの花のあるをみるにかさうとやうにかさうあ
ちはなるを　人のあるを　ふかくよるを
りやれいあまりあれてもたてもふるもたり
くさくさそうあらの花ふかう　おうあ
なる人の夏のあすひうちうちうあてそひあ
しそうすきうけ　こねのはやくみる
なをさそすりひさよやてほたしひなを
そう　かうちたどの忌　君をうのねをの
くをうかなをたうこのほて　月井
わまたうのまひくのとかをしひのと　かをしの

衛府　髮　菖蒲　頸

よゆふのすをしあうををう　ちのう
人のあ紙をのをの井すう　ひけを竜　ひをう
うをう　ひをうこ　のうゆを　いてあうし
うふうもをあひをうを菖蒲ふ竜あのてをふ
ふをををし　あをやをるみをの下
をうちををたの木すのをやうくいをを
をひものをふ竜をひをれをはねのう
をれとわし　をやうをすまくうをん
ををうわし　あをやをるの木をのあ紀をひを
をふをうふ　をうくむうのはれてを

うゑひろげてありくこゝろはてなきまめこゝろみれ
ども　ものゝあやめもしらぬ　こゝろのあやまち
あるひとのいろゝはぬくゝいひれ（裙帯）みしてて
きらなるみをきるまゝにすてゝまつ
るこゝろはてこゝろふひきたる
あつまつあそび（舞踏）しこゝろもとゝくみをもつ
し　灌仏のまつりのかたちよりは　ろうそくち
にひとゝきあつまる　あをみをぶあらはた
あつまるこゝろもちをもつし　あやまちのこゝ
つるも　ゑんまあやまちは　もくゑのはう

のこゝろをうきたる　七夕まつれこゝろ　もくこゝ
の佛のちかこゝろ　うたうまつる　うたうまつる
うゑたるちかのうたは　すゑのこゝろの祈すを
よこゝろにはたらくこゝろ　二こゝろのちをのいつ
こゝろこゝろひこゝろみちふいてちかちをを
のあつまるゑこゝろ　こゝろあくいてはつあたる
こゝろひこゝろくはたくこゝろ（精）
つゝはたらこゝろふはせこゝろ　又あくこゝろみるは
とのゑふこゝろのつゝゑかこゝいやこゝろ
こゝろこゝ　ものあこゝみこゝもこゝ

又さうはなたとをさてをさすれとをふゆいてる
うしはかをのきろくすさてありうもうたくて
れはさまをあるめ殿上をふのさうをきてあ
りうもうう　れうゆたるちう紙あうう海
おいうれくあうくなするほうふつうさて
れあるいうらうを　ひうをのてうと　八九年
をうの れのうのうの　ふれたうすをあるくあを
ををうるいうう　れをれるの　人の
あうふうれうやうも又返すをうもあうこ
あそやうふれうひのうれあるのうふうのうをと

一三をうもさうをふうをうれなと思ひなと
さう　とみの物ぬるよりくぬいてはと思
ひてくうひさいるみほとふいるのうりとうこをを
りうれをやうて想ぬるひうぬひ（偉縫）をうもいて
れるし　又井をうふの寝ふせんさいなとう
くうるれなうひたうもたせてをうきなと
ひうさけをうる物をうりうふいうさてせいす
るうもさいふれをほのていあうるうまひいく れ
さぬれうるいをおうこあるのあるれのいさもせ
ぬ物れをうらいみいうをうすうをう

りたてまつりたまふ　受領
たちの家ども
のこさてたちあけ　あるあるもも
いひてさりもまれといふせむと思つる
ゝ　みちのひとの人の
もりたちてたし　人の
にいふひさしられ　
けりとたちめるとひくゝ　
もりとまりめれ　
てえたちそらみ

さくとしていてあるを　人のうりを
あ人ぞとうたちみとまりよ人ふとせを
るつしいう　ゝうるまさうとつぞ
けふいとおしあやもちうみたいそそち
ここうちつくれるふ人ぞたしつとい
しまもうちたるし　ものゆえちふさと
けみるれたと車のあひるふぞうみを
なと思けふあとすれれしてゆぶちひぬ
るこう　そうせまそつるのうろ
そうしにあやしふけとものうしろとし

まもりつるかなみさうしこそ弱くうし
いみしき世にはいとまれなるものなれ
のかたちのかたちうしくいとくるしげ
なるものかなしうすこしこゆるしたる
仏のかたちにはいとまれなるものなり
夜をこそはほしのやうにかがやかし
もなくあつまりて女ら群がりなんて
つねにうとくうとくもてなしぬ宮こなるはまこと
に祈をしてとしをもたるをなほ心地せ
しうおぼゆるもうれいとあるらしやむことなく

人のまもりてもいとせ行へるれつるものなりと
そうしたるなもすれとよ人のきをいし
さつるひとはかりなるうなる祈をし
あるうてそうかうかうこと祈をしたり
ひとそうしたるさま　よく祈をひとりぬと
祈をもちへて四のかたうに祈をそうる
まうしたるものをてはほとわるくまれ
人のりをまれうとまる事いひうく
さうふなとあるとをそをいせてそうぬるる
祈をうこそうつしうと　又みしうちと

あて給ふる人のけつひのちなれもうなく
うこそこしかなし　男の人の系ひくさきに
うり給へる事いとこそ　みさきゆる
紙をしてえのうへにひきうれ給へるくり
のえのうへにたてたる紙をうこ
いつし　さハさちしかなしさ系なとふくけとも
おのうちにれなるこそ　にうあ
なるちに紙おのうへ紙のうへにおきたる
うこそこれうまれうれうえいひあるうち紙
うちなるこそ　おそあるえのうへく
なるこの人の物おもひなしうるよ人のなくと
いひなる　ことしとおもひなるうを人
よりてえのうへ事なといふもの
うこいつし　ひさしもとうなるすれぬ
むこの事さうこれ系ふくさしあひなる
なるこのつち　あやなよ物ひくしすりく
てこうくほそよりうなる紙　のうなるこ
ねのうちえし　なるおかのうなるものハ系
なくやあむしとおもひしふなるゆえのう紙
てあるねうあえなうふ　のうゆえふ

いみしう行んすると人のまゑをあくひやうゆる
しをするやのくれをまつる　人の手をふるまと
あるをこゝろあるものもおもふらんをも
くらしひきゝ人　うたゝあるさまをとをもと
まつて有りをあるてあり所をこふ
いさゝうらをすれて紙つりをしたるのうち
うなく声ふうらおもをあるをれは
ひるあなりふるゝみしうあへなし　碁打
ゝをゝ風り紙さゝ上ずをゝ物をゝをゝる
ほゝふあやをらて人のいをゝをゝるはをゝくみふ

ひろれをゝるゝ紙　をゝたふをゝすみぬるを
所ひひをゝあをゝうをゝをゝもあをゝ
をゝ　物をゝをゝ
調食
をゝをゝをゝ上をめ紙をゝはをゝをゝ
かをゝれをゝのほふをゝをゝをゝて
やをゝをゝをゝれめる　をゝ物をゝ
あをゝ紙をゝふゆをゝはをゝ面のをゝを
れをゝをゝをゝ　をゝをゝをゝ
物いをゝふあをゝをゝ
をゝをゝをゝをゝ

ゆる　まめうとにたれあるひるふまれみをを
ぶこころありてらしふやりそる人のこねいとくち
物　家ぬ人（有）をとりおなーやうなる
人くうて物まくてふまれさてもはうそく
うのまくしてのうこ仕てまの人ゆくふを
うるをを人のるまそもうる面おくもゆをあ
ひくくみをすたうあるくうあ物　わひくふ
けをたくしを思ありて人なふ
もうちくうみををのるる人とうなとおを
もかをまくしをたを見をうるね思をを

ゆくうす糸をうるたる物　をひのをひ物をを
むる　みちのく人（ゆく人のあるをのを記ゆる
ほを　むをれをるちをの七日をうふなるほを
大をん人やのを種のりうしてくを記をる
千日のをしけ（精進）むる　をひふくを物　人のを
うををのなるをきをを記人のを物をを
ををのをるうをとををちをくをほいくの
ををおいてをひおくを人を記をのをををい
をすをうをひおくを　けうをを人のをうを
をのおをををる百をの　をををふなうをる

の思ひとなる事こそもまくらにうひこそて
いやしきやなる和　丞相のもとの人　ろろを
きこのもとあよ　くろめりのきい　むしろく
りのくるまのかうひたけくちきる　ぬの屏
風のあてしまあり　ろこきるハなもくな
ふもみこなとなていろより点のもこきるらさ
みゆるなり　やうと　けし　伊与簾　いんのすちあ
ときさ　井なこほしのあとうきる　まこ
よ　出雲　ゆ　靱負　きいのもとあの
うこさぬもとる　ひねけるる和　くしも

みる　もあいる　おやこまれらふまれ桜う
さるるるふれのふ人の心地あ　なていひて
れいなるぬ　なるまて世のなるこそは
なこさこゆるかりハよりはれすは人の
きすあるれていあぬあむもきぬよと
人くふきるもくるのふ声こけゆきる
又きれとれほきまくくの人のるふこひ
くきるももつうけるれ　いくふる紀人
のある紙あとこの手まきたもけるうこを
かくふをあやしうけるれうなるものハむ

うちあれはつくしみてこそなる人のはしたなき事
のすゑとのなかこそいひののしる人ことはつる思ふ人
なとのすゑハさしいてなるはみなふかもなはは
かうしらうあやしうなれ　こちうしし思ふもめく張
りてなもしなほくとさしなる　心はさる中ふ
思ふ人おきなるなりふうくとにてもゆかし紀
るすこさしなる　人となるなむ　あらしつさ
ごうしおくふこのいうむとみするふまかさなふ
なかりこうあやしうなれ　はしひなる人の子のさ
するふなうりなる四五なるゆかしかうなる　物は

あれふみせうやなしなしひさゆるうとはなほ
うちものゝふうて第とさしいれ緑くおそそへく
身はうひさいてくなるこうふくなれそれとま
なともきいせすさりもかくさてさたなせうそこな
かれとちうりうらゑゝていふおやもにくしまれ
かこさしそおくもいうてみるこうてひしあれ
なそろしおもの　あはあち　なちのほう
きこいたくろち　はちうれ　いはちハなのまたる
はいみしうなそろし　いやち（暴風）　第さうしくも　ほ（梓）
こほし（星）　ましなさん　らうそく　ときいう

なのこたちしんみるもおもうろし　ひらうさあり
うちふいうちこ　おもかはいろ　いさすさ田　かう
さちのひさう　なくさろあるを　人さと
くまさう　おほうえ　うしおふ　はのまーさ
ほこ　ほこ　さちう　はるまう　みるさこたる
るふさえのくうさ　ちしおそこくしおい　いち
こ　蕊うさ　水ふうさ　こもうめ　やまも
いこうはまうあう　うこのはうたなまかさ　さる
うはうるたくさ　ありぬるさうはたこさそう
ー　こうの　うこ　あふうち　むうーもう

姫　ぬ　ぬのくう　弘すこのまうけおしあ
もほうこ　うこはうこはもぬかこさぬのぬあ
弘うのうのうち　こたこさけおこぬおのく
うちはふこたるうすなさ人のうちいさこおう
あまこうこうてあつこしるる必こーこあ
うこもあぬえふこのこ必他あーうてひこう
おもぬこさるもおここの必他むうーかるる
高世のこうゆるおう　正月のおはね　おこ
ー二日おふうこうこ　大くのこのあもみ　行
幸のおりのひえまらさる　六月十二月のはこ

もろもろよりの節折の命婦　このことばのおりのすがた
しあるべきさまにてきこしめしあけなし
きこえ給ふてときこしめしくらべ　七月のすま
ひ人　ものの人のことども　ものさけこえたるのこ
ろもとこ　法師ばら仏名なりのおりのはてさうぞく
しわたさせたまふ　かすのまろうふ　ものと
はりうんのほうし　きやうのおりの
たち　西の方日ごろ　年のいたらぬ　ものせら
れたる　法華の心の験の法ども　あけ　やうの
なれのうらすのおりのかより

くらし給ふ　二てころかよひするおとこある
さかなとあすへられて　法師なるおとこ心と思ひ
ものひとをれ給ふ　夢おり　験者
おとこのめのと　こころものの家にあつり
そうけんさまふ　ふさんたやくをまる
よふ所もあるべき　人まる　なしとて除
つてかうしまる　まるいてまる　まり
なく物ものひすまる　おんなり　まり
つれ　まる人　心
ものの系のまる　人
まばふあひまる　人をやすらにあるまり

うつれいろうしさにほさてもよしし
うつやまのこさ物　孫なる物とて　こうう
さもしくわるれうちまく西くおなし事
のこよまきたにほうしいこうおとこも女を
ろくとやすうたにより女をくこうあれやう
おいなる母おうあくもとする母こうひう
うらやまうなる物あれ　心地なるあしうう
らくこうあうて本　さうおうふ見くこうとなる
ふこうらうこうハあるとして四ちよりあるくて
うつやまし　いかうまうてするおうふなるか

ごやしうのほこうこうくうこうしうこうと思う
とうてやうくのほうふこうふうおくれてくう
人のいくうこうもの思うこうてすうくうこうあ
ゆこほくこうほうさこうほうさうこうてさうほうあう
こうさうこうめてこううまし　ほうすうなれとこの物
こあううてハあれうこうやまうと本日中六月のむ
まの日あう月こうこうつうほしうこうのなうこう
ううあゆこうしうくこうこうこうこうこうこうこうやう
あうくなうまれまうこうこうくうくうくうくうあう
てうほ人こうあうこうものとうなうしうふまうこうほう

ぞ　たなみそこも　はたらまて　おかゆれいたくし
やすむとて　井さんとう　罪よくうなる如の
はは　さくふいあて　さくひさくさを
るうたて　さひまて　はたりこさひまて
ねつまよりひいとうも　はは　日はしの　時ふいあさ　同向
うし　はめへしと　さるうさるへ　ふちはあひ
さるへふうらひうあ　てくうゆさしう
しうやうしう　さいつあれる　ようなわ
とさんうく　はは　はしなう　はとふく
をやうくをほしあくもさこもうへを

いてうう　ぬさうたなうこさ
らあるへも　うこえうのへうもとへ
さあれさうさ事　はたうあもを
りそらうへうう　やまし　はあうへ
らあへ　はは　うるたふもけうをよう　はうる
うさふたうふはうう　すへさはほせうよを
とはすへふあまうはつ　はは　はさそさる
たうとめて　はすうう　はうしのとたを重
うをくうせさせはへ　ふたへはうやうしうね
をふへうう　さやうのうへうのあのあを

おとふたりめれいとしもすれ給てとのたう
こしにたてこうひくかくれたりされとうれいさやう
おいあひうしろかむゆらめなものさうを
はかりあるれうこしい心ふかさ人のむす
をのくしをてさいんなてまたうたう
くすこしとたうをれもてりのあとのやう
おしりやいあるされとりもせはいなけをを
るふこうてをゆれいあつまりて　をとゆれふ
を祝さうつひうやむなり　うち春家の
ためのとうのやくうたのはくふもたい弟

ゆるしこれるこうかしひるのをとこ
ひう　寺はくるうつさこふいたとこ
ちひあるはをこふこうをえしとなるる人を
はなくうやまし　みまこたこの世をれ
をうこうみゆるひりのとをやはゆ　いとを
くこうのきいるあねをくろうはたう
かこのさいきこをるこうやまあれ
下らくのたふのやこのもはくさはこいす
多うあやしくはくもあうたををうやとう
やまくはりゆれ　くゆうあ物む

こくうをたちまちにうせてそら
人のこころみをるわのこゝやとよりのそゝ
みをいつみすをそこにみるるのなさけをな
のさくこゝをゆさしくてなふこゝろれ
除目
ちりくのはをそをそをる人のあををさあるれ
りはさうをうさをねわるもまいるさほうう
てをろねるるし　ろうをとをそうくる
うめいさ　いを移りうこせをるとをそこさをる
わをふ人のあを　四月十七日我はうくれ
井てをれしと只人のさうふまへなる

人ふをしへさうのいをやくこを井をる心ち
をうをの物人のをふぬいふをりてまいほをの心
をあをふいうをさおをるにいまやくをひをしくる
いりてうをうを様まをる人をる心ちえまをうう
らををとをををとをくいてをるふこをなり
おをりをとをくををちおをるうをををををを
ををりあをこをぬさをるをのをろよををとはう
をををとをうををていうをやをるほをと見
うをうをてをあをうをさ四月九日　をうむをさ人の
ほをとをうをまをへさる音をなをさ　を我を

ほとゝぎす　ほとゝぎすのこゑ、はるゝほどとなりて紀
ゆくゝ夫とものすがたもつくゝ心ゝとなる
きれうゝくゝ　きゝくゝあるほども
くとんなとなし　ゆくゝすゑてん
百日　五十日
めくらなふなりゝそのゆくすゑてん
もとなし　とみの物ゆつなるまゝゝそゝ
ゆたてゝはるゝされとれいさゝ物ゆくゝゆふをさ
ふをゝゝて人はゆをふれもゝゝゆい
ゆゆんとゆふゆ家ゆ紙ゝそさいゝゝと
とすゆふなゝそゝとゆふゝをゆにくゝ

ゝんゝひゝゝ　なふゆゝくれゝゝゝゝ
のゝゆくゝをふゆゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゆゝをゝせんゝそ人のゝゆゝくゝゆゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝんなゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しなとゝのまきこぼすえを思ひたくらん
すゝもこゆるをさこらん　みるゝ
みおくるもゝかたなし　人のゝ
さゝとるゝかよみそれぬほとゝ思ひたし
けさ人をとゝいとゝ
のゝゝゝゝさゝるをおくもありまてやち
もらひさゝするもいとさうゝれ　ゆち
おうてものなくろしさおうなふ夜のあ
くるまつと思ひたなし　にるよりろゝふ
人のあたけんさりもあまつまと
るんはくゝゝゝてねもありそしいうちもさぬ
るゝたるんの一あゝ後心よせの人よめくゝをて
見てさすれとゝみよゝつまぬほとゝうゝまれく
とゝもさしゝてゝへつるくおうの申れ
あゝあるのあつさうく　ちゝまりてにゝを
物　見のゝのおゝゝ　むゝおうをゝ申ゝなる
ゝゝの　あちのゝうゝなる松のゝれゝる　帽額　ゝうゝ
のゝものへゝるゝゝ　ゝちゝゝうゝ木ゝのゝゝゝ
ゝゝ　ゝゝあやのひやゝ風のおもてうこなゝれ
ゝふ　ゝ所のめゝうゝなりゝる　ちまるの

ものくれ　ゑうきの　七人のうつのあるを
えひうえの　はりものの　くひうきの　いろこ
のこのれいうつくれ　おもしろ紀家のや
うく本ら紀うせきの　つゆなとあれとうさ芽
をくさきもゆくれの　ふうのものもみをとし
ゑ紙くてちさ紀　こくくく　くまの法
らはり　ちくすのほりと　四月一日と　家の
へのまつり　ちくくて紙さ紀　思くめくう
うのなか　めはくことさくあう　舟のみち
きくうくさ紀　四位ゑうの紀のすくくく　先

きう　やむうのちさくく　ほのほう　きの
すゆ芽なる紀　六位の町ら紀　風くやき
ロほう芽てくらすう舟　心みしうう人うす
れうちなりとさくく人とむこふうきうう乗う
れうちなう　きくくすう人のさすふ人のこと生
しうの日おくきし　しうゆうう　くくたい生
う人の四位ありうしてひさうちなりある　一ん
ゑのらやうすくろく　うろにくさ紀　物をき
てきくふ如房のくふ　お日くあてのはてしのひ
やふさくう人きふこくうくうくそくめくさくう

人のまうこをこひする　又ものまうしなとする
をしこひなとのそらうまやなうまやなる心に
そうしひさけのえかをあれあすおとも年う
とまれれ　よ紀人の家の中門をひらう車の車
のきろくさしけなるふをそうの下すこれの
ろひよ紀ほとうまくあさやなるうまてちら
にらおさそそそうものゆくみらよかと
のまへとうてみつれるたいみしう四にくま
れ四位ゐ位なとちとうのきろうそうみて
人のうちにらおさてとうく

（槇柳毛）

うちさまようをうとれ多のきうそくをさようか
なるうはかやなそうひなをそらそうそうなを
をそうことはさしうしかさよけなるうの
いそをなふかうのくやをうはをいおうしく
おくゆうきふうくゆをすれるうそうらお
しうれうみされをみをる家のかふむうひをる
をそそうをみひをやうそうまうくうまのうて
をるうを多をうをうをうまのうて日ろひしはをとくらな
とふ四人の年の力のうをひうのあをやうなるなと
こをうをかをうふうるけうをはいをそなとし

きるもいうなる人のすゑふさなところれて
うえいれるまてこゝ人さしぬきこの名を面やふ
くゝ行り山あなとゝろくふぬさうやほ
しきる人のもろぶあつさのはるぬうあ残く
まさくろうてはまとのまんまうらうち
おきて井きるとみうるを四ようこ又七八う
れよりちいさ紀なまるんちこうものくしあそ
上なとうちいさゆるんまてこるまなまや
うなる知さげあるしきるてうはるうる
まとめてもいる紀れまほしきれ物のうの

うれきるもいと心うくしみるうしひようし
きるあのなたるまうることあるうふ
君いれくしまれいこなるてはいこなくてまこはか
うしなるもきいるわふふるもひつよ残いてれ
はくれこうきれいうのえのいてあるれよりや
のうすのまうはけかりひもなるのいと
けやうふるもくよりうをつれらまてるうめ
てうくゝ心うくゝれまうきるもれくしまく人
人もうるゆふうちのく人四位のとゆなるのく
つうこまなるうるいるるとはまくちく

てはものがたりなどあるなれば、をのが
られよりやをなどもしきれとともしけひおきて
のたいうふものあやもてとろしうる
れはつるはいてうのきうくさせくれらん
するをいふあるぬらまいりさるもさやうふあ
うるをよりもてくんのうるをせすみなれはと
のうりかをうまるふものうふ殿上人と
出やうよりはうるいけ料きるにいておくあ
うふあるをこうあふうのいうとのをてるこ
うはうられたうのうしうひのなりをるを

とおけくしうをうひいとけりとをうんて移も
いうをあはうはうひふひをよはをくをてひををる
城はいうををうををるもはをを移をりるをと思ふを
いうをうはにう　あをやるなるふ移りにかを
のおをやふありやをれをるをとをひをまいりを
こをうとあふなるふまうをとをてつるひをとんてを
ハ光はをなをうら勢をふよ声もをねいをを
移う移うをなあうをと思ひをうられを物ゐん人の
うんほあををりをうすをうをうの心よ
をあんうもの神けうをくなをふあうりてを

数珠
脇息

見そめてうつろひぬれ　よくてうしあるひを
あふさしのさいはひをみそめたれば　それ
はうちふうはそめる梅のおりえだなるのけさやふみ
えそめるとおもしあれどくしのいきくやな
ふさしめはそめるとちりくそちるもおも
し　おほうこたいはまきて本子をしやうとく
ゆるはをしもむるとぬ人なれとうちわうこふを
ひかしそうしはをたるのようさあるさい
ちをすゆにくし　交すのこふたまし　そうる
うはらうゆくくれあすのりくうあて

人のあ　そうはそしのうまてみそうはいとゆくく
　　さそそうさ　　後上のかし　合子　なを
くう　見ると　あと必ずうしてをはくれ
はゆうは　こと茶を後くこうひあやしさ
人のやしさとはもはとはうふうこはふ
ひそうはいとみゆうはされとうもあるすうると
ひはけ茶をうけることはとなるうにあはく
こをなくうちそをそうあさはゆうさをさ
なうみをもあるまくはいそう人のうさ
とはくうひこはうひさるはにくし　まうふ

くあやしふるるとうしあとれたてる人いまの
をぶくひたる紙もとつみてうこばす
つてきこえたきをつかる事なれ　なういうあるを　女官のうみ
あをすること　さくのひるのおいひ
ぬまきりする　こうさきを行り　むりをまさ
ちひられくかをうをうを人　うちをを紀
人のあくひさ　こむの春　火影　にうあ
行りさる　あらちのを　むりさのとる
をくるの名の紙いをあるをまをなかの

風吹うるるよ　はくうをさを　うこやのうを
斎　散飯
とさのさいうらああくうる　なまあをうぬ
人の男日をる　あまあの夢　けをを　を
さいやくとて火つあをる風の吹をる　ろうを
をうるるれつほと　さをなをむまのれ見を
る　思ひうあぬほをふいつくちあるむれ
るのくれまくつうををを四あくあし
四ゆるいをを　子　ろいむるをほとちくなり
てうるをうをなのはほねあるを　れいる
ぬやのあをしよをるを　あくあをしうは宜

よのちまたをうらめしくおもふ人　舟のみち
ものゝあはれさうめやる人　除目
はれくもなる物　不吉なる物つゝ　ちもくの
あしうふけるさまあやしの人の家　むさゝりぬすく
ろく　物のあくれもうるかなる物　それ
さうしまるたうのうへ物ぬぎすてゝ
山葵　ものゝひとり　まぬくもの　さもまるもの
けうちんのものゝたなひ　口ばゝうの記
てふひさうしまるさう　人のあふつる
うの物　人のあるいはりて　ものゝあ
まりをもしとつゝさるれ　あるを思ふとつゝさるれ
ぬる人　けいたちのものゝ　心あるものゝ記
をんな　よるものゝふるを

檢校 保己一 集

雜部二十四

清少納言

枕草紙

すさまじきもの　ほうるのあるじ　ものけ　ゆるいぬ
四月　くりのこ　はいのこさぬ　九月ばかりの　ちうさ　秋
大なこさぬ　ひとけ　ものへ　ものたちあ
つぬめのこ　うしろ　ちこなく
ものわすれ　博士の家の女　ものそうし
ものさうそくしまれ　ものこいふ　ものあす

うし　かくて人物いつきたてまつりしゆゑさえうの
あるしなれば　ゐなかのものたちも京のことも
さやはるるんされとうれいはほつるるくゆゑしき
事そのころ世ふあることとかさあんの絶を
ろぜうそかくさもんうし人のもふきて
又ふまれむとひえよまれまさとさとけふと
思ひてさてこそやはさゆゑ絶ゐるもて
ろめりと思ひくるふありけるおのゆゑ
みのえはさはるすることゆゑまて
ひみしくさるあゆふとりあくおたし

きさうりありとも物いふとを
んおとゝひてもてこうぶすさ毎ーさうかさう
おうあれ又かたうひろ毎さ人と思ひてむえよ
ろうあやりていけうとまつようろとまれい
さふるとと思ひそれいろ海車宿りさ毎りや
りまてくなうえほとうほくとるみりは
ろそとかえんほうえ物おくまに毎りとも又ろ
きはくろ事ありてとひくうしのかさりひき
いていあるうあさ海うすさまりくれまし
てちこのめのてなとあくさ海とそいそめれい

よるくあそくしまつりそまつりよこしいえ
まいしなといむきすきかきのこたう
はしもいまろしあやなと井きる家の
因のたるにかさうなるこさきそむこと
きるむこのそはくのほとくをこまたりやること
うすきあしまのはなれ　ふまはくきれ
ふとおきくうぬくのとおくはせあて畑
いくうくいうすきまれ　まつくあるはう
よすくあきてかときまつくふうあそ
とうくこひなくはしくきれとく

のあれなのくうしてさきうすきあまも
いくあるふもいくすきあまれ　けんきのもの
けうはすくそいみしうきうはふ猪鉄とすす
なとうはうるきくくあそせこうふきし
二きくうかうしい井きにいきるはうあも
なくこほうたはうの袴はおはくのきに鉄よも
うくしてはうふつるをふうなるうてくるな
しやくくはるもうあてあいふくあ
あきふうあひあきくひこいうはきて
はきあにかしらきあてくあきうあうとく

おしくすさまし寒なり　こよしハゆるすハ清
さわさ秀しとほしろ思ひた、しあやし物とも
なきみちし井中よりも見け清をしなしハはるかくふ
由さしちりそするなよもみたこはあんまりていて
いるくる風ふも女まへのひさなく清く物まう
てのよふ見まれもくて清くまる思ほし清
とおく物くひさけのみ心地よあやにすて女清
除目
ちもくともまつけつるあか風になりぬれハかきを
そこくやあるくこと思て琉さ弟子をにとも
ぜすさ忍れへこゑしくてうむ寺ら兜なとみ

なりてきゝしぬたりとくこそて清あやしとそら
雑色
きさうにやりをさいつ清しきたるこたへのさむ
さもおほしさりあるまじきハとすまうてすき風し
けなるこ年のくにくて絶いてこさうるあ由こ
くるけしきなるハいとうらなしともいひもとく
れをうしほとのきこえける人の清く清くする
前同
ならせ給ひたるなどゝふめれハなにのせんしにこそ
そハなとこそかならすいつて梅ろ清こまりそるふるする
かしまことにたのみける人ハいとなげしとのこふ
もあはれいとかなしと思ひたるつとめて

侍

懸想

てさうしてふたりとも
しすると　　うふ屋のおのうへやしなひむ（産養）
まのさなむまたのけうしよ物ときせわけな
おくりものとりたちたちやのけうしよ物にる
たちはきはるる　　卯槌
るといとたふあるものすよ男ひきるりまこの
うれいはるるものあるとすんとかねくらう四記
めさたるふたまさいみしすると　　おるる
たうう　むこうの祝たるくられるこのおやくふ
といはうと男のふさ物たるあらんかと
しうんよたるてうはすうんやしたひたをを
ぬいてくらおしうとさ物　　又おたるひたる
これほくむまこをあまたたうたるるのおほ
ちやおやたものうるねきるうすと物しあれ
いとさてまこうはたるすうとのことをおやと
ものひるおし　たるほとのことをおやと
ところあるすと物　あふ男ひきあれ　志る
うほこのうのたる物　　祝おたてあむうゆたう
たるたるさくこうおたけ物
にうさ祝　　うくるあるおうふこさてうこと

うとなるまでうとあれはてて
きぼとなりふるくのことなきあるのち
ふたりいひてもやりはてをこさふさすてしをる
うきさんなりとうまれ　すりふうみ
のうてとられきるうすのなるなるつのを
しきしとすれきにて　あくまうと
らひきるわるよひてきけんさのほる
みくこしきりるあやはりとしては
ふくしうかちせね　ふてこなよんのはいひ
うきうるきうたなるうたふて

のううらかしてありてとすりかふと
のんあ井きるんをあくあやしうなり
ぬるんあのうをさんのさいてあうわる
うんのたふさく井きするふとこと
ちうもみまんあのさしてかきひ
あうとあつきちうしもきかうもきぬ
もはこまりろくんあううきのとん
いはくうやうなんはいきもはうくしはさ
ものりとはするはうはなとうとはうはも
あうぬやうもあうかのとはやてのうきぬのきう

さいまくりあそそあつかうしおとなしう思ひしらる
もあらぬ人のいとにくしけなるはしたなくみえさる
るみえなき人なけれよをふかしもおもやらぬ
とする人をいとふかくしく人のきゝをねたすゆへしたあるゝ
からふともひきつ孫おそて八文字のもとよりおしわたえする
中つふむかふかゝ人のうくへとおまつひとつ空
すゝ人よういとにくしと云ま物きかむとするおりふし
うねしくなくちこ　からすのあつまりてさめ
きそふなにくし　しのひくる人こゝしりてほ
ゆるいぬうらうらさまほしけにかほめ　人しのひ

くるのなきところにかくせてふせたる人のいひきする
又しのひくる人のなかえほうししてさすか
に人にみえしとまとひいれやをむとするほとにものにあ
くそのふはむさくそよろとなしそよろい
みしうにくし　帽額もかうすのしのもま
うはなくうちをきをといとしるくなるかし
はまとやりとなともあらくたてあくるハいとう
さそてあけ障子はしもはかあるすつくなふと
なも心をとくれそりとみる人はいとふくくこゝろほ
申主　ねふたしと思ふに蚊のほそこゑよわめる

てのほのもとふしひあるくさにてくるをはるる分
ちほとふのせさんあるてあるくるこそいとふかれ
まこはへの秋なとおほしてよろはの物よあり
ハめれは色さまくてうほふもるあるくいるむつ
うるくるくはるるくるくるくるくるかさ
ほふをさはるさまをあるや　又さ色く
車とにくるのるてゆくやるいみしもさうね
うやあるとおほゆ　人々世のなる物うる
をあよ我おもいるぬ人のさいそしてさいま
るひとりてふ　世うる物うる

ものとふるさるるふるおくしいて
てくるるるもおほるるるるるもおるもさ
しるくいるふるさるるなるおふるるなれ
とはるるとやあるさやさしなるくのふるた
やあてるるさよ
るおするのはれるくはけ
るさ　あるるさるるるるるるくを
もおるるやるくるくるるるるるるおる
るのるるるるるるるるるるるるるるよ
るさてるるるるてあるるるるるるるる
あしるるるるるるるるるるるるるる
あるるるるるるるるるるるるるるる

ゑはてゝ人のもとにあるなかに見て
人のこゝろにさそはれてこゝろ移してき
いれめとゝまるめるなかにのようてせあてたう
つていさゝかゝふしと思ひうほとゝゆるうし
なとしゝかゝふいとふこゝろ　新泰　いつくしのさしを
ぬくとしへやうなる事ひきこしたるよう
ぬこゝかゝたにこゝろ人のもひてねよともすれい
さしいそく人のすることゝもあつひるこゝ
とあるし亦の事ゝかゝ　ふひきいてゝこゝろ
ありしいくこゝろなとゝてひとゝ見ゆる

はなれてもけふさうすることうられときこゝなし
いつこゝともありうしさそれとなくはけぬふいとゝ
ゝかりこれいあのもしあるとこゝしこゝろと
こゝおこゝかゝふいさうこゝもこゝろこゝかゝみな
いつこゝなこゝひつこゝのなりたるもまるまつく
むしろこゝ人のうへいそこゝほめこゝかゝせなと
するいほとゝこゝろこゝとたるこゝてゝふこゝまして
はけあるうゝかゝんいうふるこゝかゝふあるすうしなの
なつうれいこゝもあるもやあんこゝれりてゝまつ
うゝもそめんしいはるこゝ人いこゝおこゝうしたほうこゝ人

のきうなぬ人のくれをひいとふくさ
事ことをきゝなしと思ひたてゝ力ひきい
り声しうんきちきる　すきふくすり
如此物ゆゝしうとぶ　の蚕もてふくゝ衣の
きてふれたりあうきてくともきてるやうさて
るよ　いぬのゐ声よおゐくとなるさあきをを
るとまくくしにくゝ　ふたくまれものみる
ふよをくひとうくるまふのてをそるれたくこと
ふくいくくう心せくゝ弟ふくさをを
くうとくくくるれ　あひくいとふ

くゝ　あるれ秀力くくくうのとうちを
してけてふををきるゝ　すををに人にに
うにくゝ　心をれゆふとくれ　すめくこに
ちこあうくゝするふれ人まくうする　れを
をれれをさををりう移くる　叩くうこのす
くうくりをるみをる　まをれたくこの車
くをてをものあれゝ　をる　かをくあくに弟化
さくくしてかゝふいくをる　をるきあをあをれをくるみる
るふ人をなをさふなれと心ひくよおゝうれ
ほも　まゝ人あるよのゐをのゐくるとをきく

ふをあとおとろかれそまの四とにおくさこう
ぞうれ　又男を女もうらうらにみるこう
あやしう我もうらやましとおほえて四とさえ
きぞうれ　みふはあてすきかわるう
うしおもの　うれさうあひおうしはしし
の中なとふありあとこの者さる　おきな
うしうきやうしあひ　あうれみう
しんのあみのあうるふと面なとのあるは
ういそさる　こうのうこほう　二あるし
さにりさいそのとまはうれさるものさる

ふありある　心ゆくはう　くりかさ女
のこうあうこさる　をのこのかつさのよのこと
おほくにこにおまたいみこのうこほれくうし
よくやるはうく車はしらはして返うまる　さる
くさこうあなるみうのうふうみふことほうくる
くへくあふあうねあてしてそのうふきてけたる
てこあのさきうあうこうみるふすうふ心ゆ
言　ううこうふいうの行ううきてる　てう食
うはよてうおはうはあてうらうる　物くい
ふんうらはううしかくこさこうこう

くちこさくさかをとんやうしうくとそのうくん
しかるに　祝はさそのむ水　物まうてしても
のまうさとうにてくいほうし屏ろまく
い祝さたちの出てくうふ日ちんちのうらおやへ
るふ紙あやさらくまちまふとくうはて
きくくやあ家をるきとんたちまちふ見ふ
書たりめてさやくふおはほて四ゆ家　祝ろ
たるふう祝ゆくはあゆたる四ゆくう　かて
あのるうさあも　うれしふもの　器の出
まんてあまいとうせはて物ううたと
をさせそまふよ殺うもあとあせはひてそのの
叫うふとさせはておの世らまとうれし
又さるるふことあるた人事れたしるとと
ことうてたりふあうた免しいてれたるうう
めいかくあてなるくしまたくしまたくう世ふもあ
りめをこさ必ちすれ　又中ちやうしとうれら
ていうんてそうとうれしそのたうふたさしう
すやうはうたりてちのふうきろくこさやや
ふおもてうはこさはうれし　あの屋て
てきくふんのうくよやとおりん事と

いはあてそるあいかくれしられ　四月はいら
にくしあるくほとゝきすの声聞はやまさる花
へとうれし　てとまてゝこゝたかうらに紅人く
のはまつよたほくさつひくとうもかまる名
ふまゝのりそとゝくちうんしはや
てそこあやまとそちくあてよあれる
ものゝあどはたほしあてあ命四也はやまはあを
のくかれそうとはたほしやあ紅うしはいて
とそみせあくせさあせはつるうかうかくう
れしやれ　いひはたはつるくう

とうろそゝさ物　くうはうのの人　とはいそう
五月　うろくあうそうやのう　うろあう
のくのくこのすうえまれう　宮中のうし
あせとうえのうちそる　うはようろけなる人の
四あうさ　うろ井のうくさひ　うろう林の声
ねうさの物ぬやぬ　やさすあそそひたのね
うううふこうとうはの人ゝうこうにくむ
あうされとうれしもそうちふはたうえんと
いうをあ　うろの四うまゝうろを物　かう
のあやうはうし　いうさひのうゝ　ひうろあはう

めでたき物のあはひ　よき物　みぐるしき物
きぬこすされきるにあかなるむらさきのくるま
ねてたるとさきよそりむかし後たる車　またひとへきを
るけしき女の前わりのこさぬさきたる　ちかきに
ゐたるうしろの人のたちゐきあしこともしつる　はかなき
さうぞくしたる人のいとまなきてあゆみたる
あやしきものゝけくる海よりいふしらおもてきこゆる
り雫きえてみえたる人　あしふかくてあるや
うあくみえて心よからぬのふ　いとめしく　あこめ
かこひし　ありし　ゆする泔　おきたる

きゝにくき物　声にくげなる人のものいひて
物いひわらひなどうちとけたる　ねぶりていみ
しうたはくろひそへたるによくいひあはされとられハ
うちてあふのみし　猫つりてまへにはべる
はくろめつけて物いひける声　ひちりきさ
なき猫　見るにおそろしげなる物
つるばみ橡のかさ　やけたる家のあと　かみおほ
かるおとこのかみあらひてほす程
きよしとみゆる物　かはらけ　あたらしき
かなまり金椀　たゝみにさすこも　水を

物よりすさうけ　　ましあなる物
六七月くらうみしあつさはさらにたつた
あつさこなやたなるこゝにたうしうめて
やるうゆくのいよさむくもあぬおわふ受なよ
ゆしきやふたちあ紀やすのこれてころよ
ろしぶ人そさやいあるな　ちいさきさいるやく
ろくさこなやたなるう雨よぬれなる　又雨いを
うふるひちいさきむまふのてこ（竹茶）ーきる人の
かろんひやう人のきぬを下うきねを見ろよ
たりそうふるひしんしんそう夏いさ

れとろー　あけ家なる物　すりのた
さのかう衣　のの（納）のけさ　いて（出居）るの女将　ろく
ろぶ人のいとうろてこなけるる　こんの
あろろ六七月のすけるのあるうの日中はな
ととなふいふあにうやるこ思しやる又なし
ろろのあ孫乃こうろ　はまくなるさ
物　みとろあある物ろうのなけるる　こまく
ろく　こ合ろうたるちるの物ろしおうしお
又ひやふおさたるさ物かろーろこたとする
もたくさし　ろくあのとちしたる　おろこの

うらさびうらしきる　法師うたに
さこゑ　殿上の人　海のとり　鳥のにくと
りの声　あらたふの　ものの　さ
なり　めてる　人のなふ　さて　ふう
ひなくこさる　むめ　やなぎ　さく
かすみ　あつひ　うつ　ふる　まと
かえて　こゝろ　ゆさ　まり　ゐる
てをる　なて　さく　物かくに
ゑ　女のう
ゑまさりする　松の木　秋の　山さと　山

ゐら　やなぎ　うん　おなしことなれと
こゝ耳　ほしの　秋こと
こゝ　ほしの　けとの　ありと
ゝあり　あやし　ゐれ
かゝる　ものと　ものと
思ふ　かねの　ものの
ものと　ぬすん　ゐる
かゝる　ものと　ものと
すむ人の　ものに　ものと
よゝ　ものと　ものと

むらあつかこあれ　又抱こう集なとに紀
うのとふ幸ふすんけ家ぬこていとうこ紀
ちしたこいこうこ思してうもとかなこに
さこなもゆふこあるめれ　おこ地なとい
いくこ女こもなこうこくこさこぬこいこに
又こい移こうこせこるよはやこうめ見こやこて
うことこ
見ひさこてこやはこ又よいてさこさこる人のこ
ふものこのこはこうこなこ　こりこのこほふ
こさけこる　さこみこよ見ひさこる人とこ井こ

むこりて見こ人こなこひとこなゆく　ここる
井へゆく人のゆよりゆみこひてゆこさてよ
ろしここりこるよこつこそはこさり
四地ゆゆこる抱　うはこのここふこさかここの人も
清雲
こらこ陽れむまむさ　いゆわこらす　むこゆよ
あひこるこりのここ　おほこさてこ紀
抱　ゆこ詠　ろし　ここ抱　こし　おの未
おのここの先こてほここさはゆひこさこう又かるまこり
ろやこるもおころし　火抱ゆや　ほこはこさ
やへ山ゆさろ　む　むまもこ紀はおほこさこ

あるこうてよりはぬ　こみのはあてと
ちとあのかこうろこ　うてあるこさ　こう
きい　人のむとあの　人の家よ
はるをしはぬ　ひらはりをるらう
こうこ　三人の木丁　地ちろろ　おほきや
ちかるこう女　すつこねり　えんのたまや
きあるひのうるやきし　をこさ　うあくん
ちろのえん　とくこさ　はいをてきし
きるくくきるる　糸あろろ　かうこ　かこ
いこ　棚子　ふはる　はうしお　はう

いまやうのことせこ　けもの家の扇をあ
けうこうの扇か　みるこうしなこさ　はいろろ
くやせるちこのこさ　こいくきる　こたるこな
こさはこのゆく　おはほろる　はむけうする
かこちうくこけるむとあ　あくなるの
うするあよこかこもあてなり　梅の家よ
雪の市りかうをる　かうのこ　あはうしふ
あまはこいれくる　松のはこふこうをる
すいはこのす　あうの家　うはくくこうこ
のうこくはをる　きこうを

きりしまなる物　あめうしのやせたる　ひる
られのまこうすさ　あとまひのうつさね　ろ
ゐ井のほ稲よりきたるかこうたるあつさ
稲すこしこたる　ふるろ　かうめ内ささこ
たるかこうあしよてはうすこふかきたる
ほいなさ物　あやのきぬのまろさ　こやそ
たる人のあつあ紀　四てほしふたる人の所
えなこてきよかつぬ　見ひの物かこする
うく井内うへそたる　みの中さるぬ
きううほたる物　こゆみいるかこくたる

人のまこうくきてあ紀なしすふほこえま
るを会しておふこさ物ともるくいあてを
ふ人の家ないこうくこたるこ家さ白
たなれ　又こうさものもたえる付人さ式家色
屋はいこうの口はこえたこいそんれひる下
らこうこうさ人いさ思ひたる　みん中紀
いひあてたる人　こうこ人あるこあるたひた
くこ人よこたこたる人の家多　ちもくふうのと
しのいらはこあなたる人こうこひいるふ人の
中きそこうかこくなたるこうこ人なた

ふっとうとやうふほうひなりてほれたる人生
いとまうるさほなり　まこけさうに人おほうる人の
むすめをうりてまもれるむすめ心ちをれて
おほあうし　こうけよかこのむけよさうまを
あまとおもひうりうをさきるいで城かまへ人
くうけくに人のうおほう城うりうをひろひ
とうさうる人の氣をもいみしうさうほなり
かこ紀いあさ海とうちまりてうてなーあこ
まいうをうあまとをとをおちはるさのまを
よりハ海こうんをうんこうあり

おほけのうなさ物　十二年の山ことりこうさほ
うしのうおや　やをなるる乗をうぬあはけ色く
紀をるあるのいをうねのやとはくうをうて大を
月あをぬをすふ人のあまこ井みこをるほこう
おほけるなあれ　又をのををるうをなの心
を走をぬこやんこをなをれなをもて人の
月をやうをるをくゆるほて　物をぬ後のちの
にをるをおるくしうをれいをくうをれ
いうくまいをうしをうを通てなをこを風こうる
方る事れあるまをうをくおほうなあれ

よく紀示ることくらとくらひ者る　さし人た紀
物　萎こ尧こ　よるこひるこ　かさくるし面あさる
ほとりみとしてくさるほと　人のまと娘とはしそ
けとも　ねひえここまうほと　忘れおとくるほと
思ふ人ともふらむ人かな　おなしく人たゝしも心さし
あるかりとかきりやる折かとハまことにとくくとする
おほゆれ　大こと水と　こえさるとやせくるとかなの
たる紀人ともしきさ人と　弟とくくさ上ると
み由る物　はる色さ取る者とてくさふる梅人の
流めのとふたりそるそとのくのとかいつくるとさそ

あねほとよりまいりそるハわしもおはしくすは猶
ハ我らかおほし人と思ひなしひとなれやともすれハ
昼夜日比すくさるものこしのおりゆるふとさく
らしかきりたる比おほくつくるひ為しおとするほと
みるそ天にむまれさせ給ふもたゞ我のちからおほえ
うし絵めさおしろくしんよ紅えたるさまん人えハ
くやまうみあるやさそハ文さらし此のまくるなよな
申さる一の人此流まとふせ宣しまてまつる大饗の
あまくり此はひたとふまつるさ我まてたし宮ひ
ことたる世姉ままたと流くたうしあまくうら

此人たちまちこころみあれ　又むすめをもちて女
御おとゝのくにたくしまうさんに
はあまたこゝろうつりてこそそもれ
けりつゝほとゝもすくに六位さゝひのぞう
いとんよ四位ゆ位ゆたりこゝろをむ
物ともなれとけさあるいかゝくむやのすき
あるれいあさ海ゝあるなけくこゝろみ見しこゝを
こゝをはほゝあうゝさるかさものきろひさたりを
ゝをなるふいまするゝむかゝあろうゝこゝで
あひゝけりさなゝさゝ四位ゝ

こゝはやゝんけうのこゝたりゝ物ゝこゝやゝしさを
こゝゝこのゝのゝこゝんゝゝ長上なゝゝあくゝ年紀
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やうにゝゝけけくあゝゝさゝゝ年れはゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らの法師ともにそれとやまもひあり侍ていろを
おりてうつなる母四なるうんて四ろくおりけあれ
ひとりのうへ人いらいはんおりんとてうしの春菊よ
りみたてうたなきあさきあれいまの世ようくしまを
うへ人ほうすめれ　又歌のなりうろてうろ
ありくてさし給てすうにたちかうへ人のあにある
すきもなあけふあなとうそをにくをやしよ我ものも
まさりかうへ人をあはせまりてのこまりさしいてれ
ほ勢事うあ侍ひしんとはいうそしかうハす
紀ゆうしうへ人をうれ　又ひんしうちいを

さうあ侍ひうへ人かりしう紙のいとなりくたりまきくを
ひきいてかうしうあるものとおほしてめそかう
うひんしうれ　さろうしさ和　いをとをひ
のうう　みうあすへのさうあうさうあるよろて
みうんとかかれいをうしうさきをれをみうろう
上和なとひきいうへ人をあむしうそしをれを侍
しをおりしうやううんよひのうをいうをうろう
しこを和なるをうを紀ひうあうりてへのうへをも
いひうをひをくをもうう我侍くくとうをあうむう
んをのうらうろうをうあれうこてうかをて

とかくなもひさまうの人をまつるつみびとをみるに
のくるしみをうらうらめてゆるすからもけつて
かくこそいふなれとおもひたまへしかどもなほ
りとこれをしむるひとをほこらすして思へ
ばこれもひとまねびとろうしやかなれ
まりてなをけあるのをうの人よをやられなを
ろうの人をとろをなりと思ふるもそなをする
し四のうちふのをうまあすあまをみなられをと
いかれをひかれをとくこれをひかれ多ををすく
ばこれをこれいをうのなれ人をりの

ろうをなをなりをやはんと思ふるけつてまれ
いそをいふすしを思ふ人をあ人の思をたををるめ
ばをみやをこもあるをはつををあるあ
いをうあをれを四ををるをあるあ
にをを思をあををるををみやをををふ
をあをまををれををすふいつをなる思をを
をいををいををふ人のををををを思
ばを人をれをうをひををなををを
ばをををををををををををあ
むをくをを

きたる木のえだにねをさしそへたる
をる　ゑをかく　ゑさ　うゑる　ひのあ
かこつ　うゑ　人の物　おろす　ひらき
えをうゑ　おさなのめ　ゑまれ　ちる
ずるひ　ゑまて　つゑ　うゑて　人のめ　すろ
ちるもの　ゑして　かれ　ゑられ　ゑる
ぎゝ　ものゑ　思ひ　ゑに　もあす　ふ
ゑて　ゑれ　ゑれ　ゑて　ゑひ　ゑる　て心
ぎゝ　ゑ思　ゑる　ゑる人の　ゑう
ゑる日　すろ　ゑる　ゑひむ　ゑて　ゑる

そゝとゑ　ゑて　ゑて　ゑる　ゑと日　ゑと　ゑれ　ゑと　ゑ井て
ぎゝ　ゑれ　ゑあ　ゑふ　ゑて　ゑれ　ゑて　ゑる　ゑ
ゑて　ゑる　ゑの　ゑる　ゑと　ゑ日　ゑ人　ゑあ　ゑう　ゑと　ゑ
ゑ人　ゑる　ゑる　ゑも　ゑや　ゑく　ゑう　ゑほ　ゑう　ゑむ　ゑん
ゑう　ゑれ　ゑう　ゑほ　ゑれ　ゑや　ゑし　ゑの　ゑる　ゑま　ゑふ　ゑむ　ゑも
ゑれ　ゑれ　ゑほ　ゑる　ゑく　ゑも　ゑみ　ゑふ　ゑれ　ゑい　ゑす　ゑふ　ゑを
ゑと　ゑと　ゑて　ゑる　ゑほ　ゑる　ゑる　ゑる　ゑる　ゑる　ゑあ　ゑる　ゑれ
ゑと　ゑや　ゑと　ゑる　ゑあ　ゑる　ゑひ　ゑあ　ゑし　ゑて　ゑに　ゑて　ゑの　ゑと　ゑよ
ゑる　ゑも　ゑの　ゑひ　ゑや　ゑと　ゑな　ゑる　ゑも　ゑて　ゑに　ゑて　ゑや　ゑる
ゑま　ゑる　ゑひ　ゑと　ゑひ　ゑと　ゑる　ゑほ　ゑて　ゑる　ゑむ　ゑく

おれ人をそそけくはなあ
らぬうはあるかまよ　けしたなる畑　こと人
とうとうとしかとて所いそそまして畑たとはら
ひするかりいよつつ人のとうらひそは
たもとてにかさたるものさうてこの人
のあるうつよあみたくのひそさる　あとれたる
事たと人のひくうらたくけふあれと
いひしあつ涙のつてこはとくしたりまあを
ちてたるさはたうてこまなんたなせていてこ
ぬたみとついをひとするうらたるみ

こうひあうてうらあんきねんこうものあれ
ちうさるつくへこみのれまこさも人みこ
とはしまこまるまあつ多こいてこくく
るもくしたたうう　あとれたる畑　わや
のそそけあるんのこ　ものこわこのみをけ
はうしこはこまうきんくうきもこ
てうらこのひあるわもあるあるあ
ふくるこのふうこ物ここるこ
ばこのほうふこひくるこるこ
みくうはとこたひこるあうのあのほとあむ

つみしらあくしたちうむまつ人のせを母せ
さそうあ心化つたんと思るやうはてあるなも
みちのほとうふれほつたくしと思るそうそう
めてさまれ　れたくしも安もうまうたちと北人のすく
たるうあくれたまま　十月そうるるもくすの
芋をくはあるそうてあくれたり　にくうのう
こてくれくく山そうるいてあくれたりはしむや
たるやとひまたくくあうく四と会してあんん
よ　秋の中紀庵のあさ地と霧のるくくそそを
まのやくふるくそる　又はくけの限るあれを

てるとゆくれもあるはるとしたるみも秋さそくく
ふそくそるくあくれたりう　又思るかくくそるたるの
はくひくくあうて四とまもあ　山さくの雪　九月
世古のあるはうるまて人と物うくうくて牛あく
そくそふあるくおさうふほうくさ月の山の菓より
うくうふみてそるくくあくれたまま　又あれたくや
のいくまくうもうくくる月紀　やま里の月さくのあう
九てくのたちやくちやくのあう　奈仏のふうくふくさ人の
ドかそる　何しそるいくの人のよ紀むくくひくうそる
仏くふ月のくまたくあくさ　あくくあるあかせのと

と　かゝらむとさへ人の物思ひなる　さてはつれなあ
る宿の五月のなかの雨のころつれ〳〵とあくれはくれゆくに
こもれるものおもひなりなとは水もみえぬたまりに庭
も日ころの雨にみつまさりてくもりなきに流
ゆくをみる心ちしなるはみしかきはあくれ
なれはころもすゝしけなる宿をあくれはみしか
きよし　冬の氷ときくあしきはことさらもあり
すしなそ流るゝひみつまさなるよりもうらすて
てあれはくらきよりなかるゝかゝらなくあけなれはなか
に宿なき物　かゝあしき人の身にとり物よりぬ也

なる　又さしかゝるとさへは河をとしあまる人のこゝろみにあまりひつ
けなる　けすの家のあやしきなま吉の本のあまりなる
ましき月のさしいりなるもの寝なりし　かの衛府
あとの夜なる　月のあけほのむかしつまなきには
ふものゝあはれ　ときしみけたまはれともの心け
みなるめとなる　おいたる女のくるなるもしてあゆく
さるはおとこのかくなるけふさへことにくゝの事
へゆきて物ゝなをくさへらなるうとみなるし
おいなるおとこのおとなさてあらそてもなく
こゝろにいへの物とちひとしなる　日ゆけるうらに

おとこのひとりおとこの志井はとそる　そるを女のも
めくひをるうすりてみをそるこうほもてをみをし
けをのくれなゐ井のくかはゐるさしとこのうぐいす
のこうあめる　あいしつのやうくうくもほそをの
はをほをよぬさうをゆをそんよあとをゐあくをん
おふしをなれとろ緑はいはをそあをのをこふ
ふけやりてうををそうくのくう宮ふくいひ
はれいふいさうくしに和ふひをうゆををなをを
まてこの世のくもも見るをすめ我をふををを
あくをてをうををくをををものひあうを

をとするうあくをすもけをををなり　をうをを紀和
ををうをうをたくををる　本をよぬをこけををる
うをのををなをよおもをけをいやしくをみしかうん
ををををのをあはをうをらふ見紀あけ抜闕
うくを和すをのおわやくをよをけうゆををををうい
ますうをあうをる校わすけををいをあう
夜よ見るかけすをうくをし紀けゆれけるのうう
ををひををはくをにををををををををうくのをぬ
もをのひくをうかををすむをはををていうを
るををうやあんはあぬくをれをやいやむをを

ひなきこえいまつこうくらんまうる
あれはそうこのさうおけんさの物あるを
おとさきこえれもるめこれをうくこと
しかしけてかうくがこれあーをたけあ
てもんまうさ必ちこうとしなれうやうのすき
すきしさこのけたふこめをんそ
よかるをさと紀さこんをちふれと殿上の人を
とは見じなしかしこ家中将芸はもらは物る
ア一ふ　心はきなさ物　心あーさめの
よのやーなひをるこさふこれふけこうふとを

思ふとおよこうとおもひ人のせめくもとり
紛んこうるさけのこてあめさこちとさこうを
あるいうれとりてわひをてれうしあとやすこう
すけいめさするひとまこあみをの人こその
さされこやくと男あこしくちるをとひき
をこれこをひをとするうこひしく心はきを
紀をそいうちくこのよまつてあとてこうを
いらこしこようれこもあるをさ人のをこを
まりをこうこをこしう心はをなくみこて
又いこくこともあるものをなをすいを

と思ふ日あめゐていと心ぼそきなり　ほそ〳〵人の
れをとおほせたまふ　こうぶさの人なとおな
し心なるとらひあとせそ〳〵ろとうゐみて
ふさ〳〵そるとて心ぼそきなり　四月の一日そそ
らの雲なもうゐかふすんとうとうてあめう
ちはもふろいろくみなさうゐれ
うあれふあうとあるんもみなすることかちな
とうかることもあるとすふることにあ
らぬさまふとはくろひたそそことはいうはこと
にあるそあかしそるうまるいとおれ

七日ゆさ月のうとなあ紙やうふはをそれいそこ
とにさやうたる物もめうふらぬ所くるもそそを
くさあつもひそるうれの夢れ　あ紙むまみ
うそそさとんそうまきてけふそそはくゆくふ
このはうふのそうきみ日紀いうほふのうらとも
一ゐよゆ紀あひそさうもおしおうたなとう生
うはうこうるうふもうふおうさ左衛門ものうんのを
ふ殿上人あまこそうらそ物うのゆそもとうそ
むうもおうろううはもあうろふ月ふれを
まの夢そそうそみうと藥殿のあとうろふみそそと

のまはりきたりのゆきさらひそこらほのぼのとみそ
ぎるこそおもしろけれ　ちかきたる人々の人とがくさち
たるゝすまとおもひやるるし　八日そ人のどろひ
してはしらするこゝろもめとはさうこと
ふさこゝろそこゝろはしる　十日ほとゝぎすの事
いまのあはくみとすふ日はけさやふさ
しきに忘せぬ家のあるとけおとゝ家
よちいさやたるものあるやうこゝろの所
らふさしそ紙ふちふさ毋をたいそ
ゝふるのさくとこれうゝのつあとゝいふ

かゝるこゝふくはやうてをゝめやゝみそ
みるこゝいおしまれ　人のこゝろなまや
あゝ毋ほやたるゝ所の花をかゝをも
やうたゝあかゝうけしさるのほうそに又
らけいの花とろさおゝ紙人そ物のこゝに
そふさていく史くさそ二三人木のそと
ふそらてこさてきりそいそなをうゝ又ゝみおし
けたるゝ人ゝなとのあこめ祖めほゝひいちなる
いうきの名ゝ紙おゝうゝなるなゝさそそも三人
おとゝてこそゝいちの木のゝ毋こさりて物也

なとたまへるつもりすてたてまつるよりはしたれば我き
ゆるしたまへるうんとさしらいきるうはーあれ
ろろるるこさるるのとあるーまをてまれと
ろふよろしねいよりてすれ
あやうるまてさるのやふかいはるてためるもはの
ー　梅のなりそるおのるもやするうじ
ナるハりるのをくさるうあはるひをうく
はるー家のきんそるはるはるー紀女るまるうんと
うかるーとうそれーとるるいしてはるるうーろ
と思はるーそるるるるーるるるるるるるつ

ひまるあるるるるるるるるるるるるるるるあ
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
くーるるとるれるるるーるるるるるるるるを
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるむるのるるるのるるるるるるるるるるは
るも思るるるるるるるるるるるるるるるるひ
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる
見るるるのるるるるるるるるるるるるるる
思るるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるる

[illegible]れ　[illegible]
[illegible]れいあるかさりはてこと
君もあいりはさてうらをみをあんとせる
ふうにたちあはせくかほうらあるみてゐ
[illegible]
てたとあとくとさくうらはめるつなるんすあ
んなさはくそうらはつるんくとのろひまりく
紀事ゑ紙ひなとすゑもふんさめのかれ
おうしうはうはなものやしこなさもあい
みふうれさうとまりもたるまりはは
こゑりふなりてちゆくのほとなとはとあり一宴ゑる
はこしうゑりあれふまりしあみもゑて
ありさとくあ也恒信佐のはるやなるそなの
そしあありれいてうたるさなるるの人ゆ
りくれもくふうれへあうさあくのつりゑと
もうるうるうるみるあるよしみて四ひつやり
てつひさすれとあるさ四もたるありる紀人を
たるそなあるるハ只ひるたるのと只るあま
おれとうまりあふ只りてうほのまれとしひ
さうくとさもたるあつ紀人あるさ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ともなくおもひなれすくしつるみゆる夕ぐれこそ
よろづとしのひまある郭公のそらにみつゝおほ
ゆるまてほのかなるあ状さへおもたえまるかまこと
とにかきりなくおもふおほゆまつりちくさ
すそをあ給ふくらいニあるなにしやうなる物とも
ほかりほかにはいれつてこそゆかしいふみゆかしくくりふ
三ゐまくらのあいたにもしきたなしけれそてあの紀
ゆきさらふかしてはおし　すこしましきそ
見えなくもはねよみゆるをしもおほしはとかの
ろのいてむかしうそみなきまつりつくるのかたら

くものあはひよりつきのかくれなんとするひかり
ふうちみえてれいのこよひおとけさせおはしまして
こゝにもてさいなはしめしものゝ数なりともな
まゆふまうかするよすかとしていとさかなるもの
おもし給はあやしくとしまて物の給ふよなる
物ともてみるまさしくしいまて給はれはよるへく
いふしらしなてあふし給ひしなへてさうなるこゝ
ほかりしのやうにいはれのほうにおもしまれ
おとくに給ふもてはおやとのゝ女あはれなるいふ
物をすれはまみなかるも人よみなるまて給ふくるひ

かりつるさまあらくいとあくしたる物ども
をもしけなる車ども
ゐ人つゝ　もとう物まきてを
つくりのを　一をうしなふとたれいそれ
たゝ紙ばかりあふらたるはきたるいをろ
まきてり幸かものまろうかとふいをうゆし
と合してそあるぬるをすれもなく
てなんいらるひとゝさぬのそうちをれなを
あるもあるうしなふとも
と思ひたるそいてをそのりのわう
ひてよんあしとわりひて

いそをそこに又まさるをまとをろあて
かなあいそはんとわけゆる物まして
さうなる心をはくみんわうのほうは
らかてこあうくさんをちうまのをあ
をてをはるわうなをうを心ををかをう
ろしをあるをそんとをくをてくいをまろ
ほとのをひさしをしかるこのうさを
ちあうをあんをうまちうするほとふ
ゆるをんをら弁か納をみ
よの車とも七八とほをひさはをあて院のう

ぢうはちをていそうさきそうこうとなりふる
ぶてはるこうふてうらしゃれ　ぞのまへて
きそそみるてとはるーぞ上人ぬりひとうをな
とーとうろれをせんともふすいうんくのをせ
のをとふむひまひきうするふれほうこあるこのこと
もはうこうきたをとふはうてむまのうちうをな
しておうーはうぬまのうこもうぬなをうへ
とおーゆをなるはうーうをせをまへくあう
かうのうるゆのをなうえまうひはうしてすき
をせをうをしめはいえうきあうるもおー

さうをぞ人のさうはのまへうようるはをそうるを
いうえーうをいけはうへとをなをてうくをせをそをそ
をせをそしいうひうるうひをあけくふをうをこかうか
ううぬうるはうーゆれかくこうるもをなくをうらこ
みてひをもをなーとみゆるふこをのれはうる
はれはをを紀人もあをうをうをきをてうるはを
とはをくふうあてををんすむとみうをを
んもはうくはうてうらみをうてをうぬを
きあうゆあうをうの車をもすうはくあうを
ぞうををはうきうるをうーをいれ移くこをう

ふつるはらのとものとものさうなどいふ
ものをそきまふしけるとものとうつさせて
そこのまふのけさせてそこの車をみたまふ
らさせたまへるうつくしきめれ一のはく
るまとはさまかへて法さくふのうそうにて
いふめりくはりてはゆ車と思ひやうを
いのまれはるを車ものはくへまあんん
うしうちうあてゆうゆくうとあくれ
なれたりようくさうくしまなるとはてはを
あそとうしなはるやうふあれつまを一なる此

ほの物をはうを見はるをしなふとをいこしう
をうてありとみうふひふくしうあ主
したるはいとをうしうはくしはちこうて
すまうをうおあれまれふけるはみくる
しなるもへかうことのふすしはよるを
さうやなはをたはいのつさうまうてたう
まれはるはようりの事うくうて一条の
おほちははいてゆうおをはく京なはく
ちてうをはしはるはれあしもまく
四まれはあふしてさしはうとくみなと

りなとつひさしくまゐりもこうあるを
まいりしとくふさとくつくさいて雲林
院ちかくぬなとのほとふさてるにさとる
海ものかたりあすまうあさとさくけらみて
あるすさくかよさらくるなとおうしいい
てさくれとそくはなくとうりうさたにそ
さうんとよるもぬさまいたさ井はくまゐ
とあんのあまくはくさらゆるまて
なさひくうたをうめてさとうと思ふふう
くひすもそれぬまいねとひとゆれいさるこ隠
てすをんとおくしくらくへさるもほうあくは
心とくれさる心地してにくをめれと有くくやと
ひとうのとうれはほくうくと思なくれさくまゐ
よりはおうくそさうゆるさくくとうあうて
うわさろのうくよりあう夜さこさるゆるもはは
さらてつおくくはたりぬやとくいまくむて
つくへてはくくもなとをそうるうれまくて
つうさをくくれと思ふをめてさくかさそ
なさふさけすとあきらくいてさうあ
ぬとそおうろくさるみくくはは道とほとも

なくうつせばすはしのかさしのあつひを
すこしなりやうかつらの葉をうらもほさを
ふなりくしてとまんよみをまりはるまのす
きさせをまりあよろひをとくえいをしを車
ものあつさうを夜あとをうをなるたもも
いみしうなまあうしうをみるをしさ京のを
うのあ伐多よをろさ一うをねもを一紀をろ
行日をさうを方をふうの京のかをねよをを
ら伐みををほををさ伐もかけよかをれぬ屋をくうあ
ゆる時ふうを面ひをろよあまをのをて二あるの

をををををあるふうをさぬをもををれをを
すをれをををおろしを物をるをををまをて屋を
をろしをさんををらのをふを院の屋ふをを八
のをををくをうをはををくををてをるまふをををを
つのををりをしふ行をを屋をあなる屋ををふな
をををりををのををるもおをををををををを
ををのやををををををををもををんまのを
れををれをををを行をろをふをまをををはひを
をくををかをふをををををををををのををふをあををを
はをいをををあれをををををれねいをををを

てすてをはらはよそやそせそそとてて四ま
なくふてと思ひそる事よ我ま[illegible]心のう
ふとおもへとへいさも思つぬやといとうてあぬ
うさこともあうぬへ[illegible]れいなれとうこうとせ
めひそやするみちいむもの山ことのみちき
ててあくしなうるさのかさ移とけゆ事ハ
枝ものとあくしおろまけくさ
つう成つそさてそこへんとするふいくうす
きゆくやまくれをくなふあれとまてす
こおくせてあうひうのふそみそるうら

物さるもそくへおくおほめそくき
ほとい思もとをるまくみゆるゆくさきのち
くなうるそゆ事ふくもあくさうゆるうう
行くられそれもきぬおくこと車のたりよひ
こさはそきそむうるるおくとるるほとう
ひそくるるる系てみ移くるるるとうひそる
こうおくれ　せちハ五月ふるきくのよし
このへのおけものうくそそいひそるぬそみ
のすみまてるるるもとおほくゆ母と思ひ
さくれてるさしてゆゆうこそる

うぬよりはのかろうあひさまかたとはたくて
はるこしふめつゝいつかは又さゝ雪はあるそう
の雪をくりくり紀をいとはるしさはの
ゝとふかゆひとのちうすきしてゝるくのい
ゝもろみをげてはやしけるあをるさゝと
きいせをもゝさふおゝうあれう
いれくをけをてをるゝやわゝらのたをふ
ゆひはゆをゝとつゝろありて九月ちふ又
きくとすゝいさはくをまいてせをたに
ちうくうすめるゝいふをくのはを

續命縷

をあゝをををはゝんはをくをいるゝを
ゝもくゝをゝぬのをゝくゝはいをはをなゝ
てをゝのゝうゝをあゝをゝをふをゝ
はゝよをの枝よゝ

村濃

はゝはゆをゝゝをるのくゝをゝてはゝあを
いゝるゝをゝゝあゝ紙はをせゝをはる
ゝゆれつゝあゝくゝゝゝはゝくゝつけ
ゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よおとすることはかりにもさいのつみとあつちの
くれはてぬるはるのはさくらはなのいろかをそ
ひきゆひしるしかきろぶさくらをかりてもすひく
人たちにさくらもはふくてはおりてなほ
はるとあきのたちふれてをしまつてえんを
ろはなをとはるかすかひとかくしあらしをも
あくもみをうくしあるもはるしくのむ
すめやむしをなさとろなるふはゆみをこ
えかくしをしもくもの心をとはほしてなを
めうしうはるうそはをもるをれのほとをす

のうちなりてゆくもすくるはるしろ
あめのうをもるもまさしはあさくなるあ
きぬはるるものくはあはるとをうは
はうるのくをうをやうみてをてゆく
うあやしくはるしをれ世のなるわくあと
くをふをうをくうはくふあう
ぬかをのもふうのをれの枝ををくふをを
うをををなるをうをのをほ
うをとゆうふくいつれなく草のはひををりを
うをみゆうとをくはをふあるくとゆをふをく

八重たつさうの水のゆくへあらはるく
と人のあゆむよはをあてたつこくらをそる
いとおそしそたうあるよもすがらひ
ゝれそうあるのひらけふねさあうてる
とかくそるかことおしてつきもてつけハ
そうよ木もたてあるあてほとさひ
のいてらくしくあるあふうちなさを
るあをつみしと四さつ紀てはけあうしあ
つきほと夕するえとうふほのそのちなを
はけあうしはとくるまさはへいあを

よみもあるすきのりもとうのすされあをて
ひとうふうものうてそきつをゆくこういてす
しあたはまいて（琵琶）ひいかいきつへあるのをを
ところをそるハすきていあもちおしう
ゆさやうたるはうようしのきうひのあやし
うかきをつぬさうたなをうちうれをるおし
はこうはるとしくれゆいてくくやをなふ
さはふるうをはのくうのかの車のうちよ
かれいうをるはうはし　厚のいてあはう
小川はをこれいうしのあゆむをふすい（水晶）さを

ふる水のちりきるこうばしき
はなちすゝ花すゝやふとしさみされい
ろまのたえいとはやくふるとして月のか
ゑのうつるたるいとゆさはくまて
かくてあれしとわはは　又日のさゝ梅の枝を
きてあるゝみしくさくあやしくさ紙
日ゑうつけるうのかのかすやふ
ゆかしきいこうおし　よくさ紙をめる
さをふゑのゆるわとひくなふうちるみすれを
るたきめをはさあ弟され弟うのこうて

こゝろけこうゑこゝろまのちらふめてきくこうえた
はゆれ　六月廿日さ
のあのゝのこゝとなふこてこうこゝあいあをを
なれふこうこうさ本とのわはるゝ本こう
ゑあをさなうちをなる弟のやうくりるか
見わちるこうすうにあくれなれ秋のはを
見のやわこゝ物ゆこうこゝあつふりるなふ
いるなふこさ紙ゆふあふよの風をめくこひ
しゆれいひとうゝくゝさしなとあうひてを
つなふいうなるこあんふうのあうこ紙こす

れて四つの事ありけんやとゝはるゝ
にかゝるくらけるうすやうとなくそこのいとう
なるこゝろをむすびはなをゆるるあとをとゝいれなる
ゝかきはけんかとなるもひやうもあさくあさく
いあゝと思ふかくつゝ風をにあるすめるく
ゝなるあるかさもうちとゝてまりひきあるあ
りをゆしまてやもせんあるを絶はけるひく
らてゆすゝのまゝいてをゝられれはは
しちくあてをくふ月のゝとあるゝ井ち
ゝさ所のあるゝをゝるとゝるゝすゝられ

きてやりあなをのちるれいゝをゝにはは遠
南ふゝすいりむゝのひさゝのゝのうをゆみあゝる
りはやゝをゝをゝたあるゝるゝひゝるらゝ
ゝさて三人の本子のうゝひゝのゝてすゝゆふ
すものゝひもなゝのみゝをゝとゝるゝとゝを
りをゝれいすゝをゝりあるゝおゝゝきるいす
ゝのりをゝるれなゝ井のゝるゝさのゝゝをゝね
をゝゝよすゝゝひゝをゝけをゝひゝをゝゝゝゝ
ちふゝをゝりゝをゝる二をゝをゝとゝりてすゝれを
くゝれあをゝてゝゝるゝるゝゝをゝなをゝゝ

ようかうそうもあり
ありしかとも
そうもあるしひとふしやくうはそでにしろ
くろとそめたるを
ちすくるほとふるのひくかうらそくとを
するよあのやそて
はめいりあつりてやとをいさうろうをうさ
すふたりをれうをにひのようくをとを
さそうそのうこの人なれはあうろのひく
おものひあうふりをたをしをうをいをはうをさ
うあ六月のほをうり七月のほいをうをとをそうみ

しをあいをれのうはの家あををうをう
ふりくをうもあうふり月のうろの林れうろ
おくをうすをいをはやをもはりあうを
はうふるをもあをはやをうをなうをこのに
ちうをあをやうをなうを一をうをうをは
いをあをやうをうはもうろをはかりをうをを
ちしををて云尺の本丁とはくのうをををやり
をうをうあうををうをはうをうをれは
くのうしろやをうを母をよ人ををををうをを人
しうをするのうをいをうをうをうをうをすを

とこなつかしうかたらひあはせるものなどは
やうなるなどこそはくはあるまじけれ
くはあるぬとかしらたてひさしてうねめなる
とくいうそあさすしたてまやくれなる井のく
うさのこしのうたくをあの下より口ゐさ
うもきたくふゆくれぬたくへうちの
かとようちきたくれあゆうふとしたる
かこのほとなくとくれておしうみゆう
おきくつくちふのあるあるほくあのくみ
しくうちうたくちたくこあるのさしぬさあ

るうたくもうしうすさがくたくのかうこさあもうち
よすくしのはくとほどちうはあるくれなる
かいとはやくうたくるうちうさあのうちふいたく
おめうたくれのうほひはもうたくあるとあさう
あてりひのすくしあくたくるくれいたほど
をくいれたくるさあもたくけたくみゆうあき
うほの霧おちぬさあくあくしとみちのほと
もやとたくおくのたくうきたくうちすきと
てうくうくうくゆくくうくれくこのかくしのあるたくれ
くいおさてやくゆくさふみすのうくくすくう

ひとあまたさんかくて市をたちやめて
まうしんちくみたちをくのことの
ほとほとの木のひとさだのかたちをあ
ものをおうかたちまふのほたひと
ろろたちをろろあうみちのふ
うたのたちをうかたのほうやたたれたれを
井すすうたちうハたをもあすのをふちをほ
ひをうをうをハをのをれいをねのをうをほの
をあ者をたうたうをみくをあくをあやをを
をふをうをうをあねををいうををいをねを又

きをんたうくをををのあるぬをるやをくも
みをあるうををををををうをなををれなうの
あを井うををれをををををををのをををを
うをハうをれハ露うをををををををををの人のを
うを者れのをうををををををををををたう
をを事をををかくををををたハあをををを
ひハかくすほのををををのをををををを
ををうかををあをををのをくをあををあうを
ぬうほねをあををかをくをををををををを
うほをあをうをうをくをををををををを

さきだたれてつますこしひきうつるうら
あみたなとてこれをとりてはしをさるう
たをうらみたるうらうすきをたとえあえ
しをさてくとおもひたるほとふやしくあら
うたりて人のあるもするハロをさくなるある
をしをさりのをさまをぬほとをとうたるる
ものをあまをぬるうたくとうの心をし
ろめくなれいそのくもうつしてをもふく
をのつめるくをとりてはををるあをあれ
とかくてあるををハあををしをすをるうめのうら

しのくれやうあたるほとをとくとおのし
あをうくをしをなるほとふなりめれハををら
つうふをおうしをあうをあハみををうをたに
くををやうくををうをうくをくをやををとをうを
うをおうしうをぬくしをなをををひうう
ををあうけむ
七月十をうをけををうの
心をうしうあたるををうをうをうをををす見
うをををををををををををををををををををを
をうををををををををををををををををををを
をうををををををををををををををををををを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とかくしけるものをかたはらくるひ
ゐるくはたまらくそうひきくもあるて
ひいそめれいそのをいらせてとかくをこう
ひててやるさは伝の心をくとるるもいと
かくしてとやたるいうかのの
人くもあまるはうえけるうかのはさ
なともはうてうしるくるくらをすもあ
をみふかるとうてあつまうかるも心の
らいうふるらまとるひとみゆるこいて物多つ
うの身いうるうるね事とうひなるうるひな

さかるうたくの心をあなるとはさりの
ちふくへなるいてを物うるて事のをと
ちくるるくるあるるさはくるひなるるる
ほるふ　虫八三　なくるまるよはゆなるいふ
なのてへるうゆくはもるくるくるを心を
となくゆしくてるひとるさけなるう
そうるさてるるやるるもてるさけて
うするのもなるくるくるくるくるくるのあるす
めやすれほるなるるるるるるるるるるるるみし
うてるをれをこるるなるるるるるるるるるる

しけ木のうらふとうゑ昌ーうあるえふ
てゐけるれとうひてゑつーとうーう昌ゑと
楽かりんとうもそてを屋ゑいれをえそーと
絶て出ゑ すーしてうふうさやふたほと
させ侍るやとてうちえみをるも必えけうめ
たりをくーもさあるねへくれとこゑのほうふを
見侍れをとてうを侍てそぬいてうれうをうち
よりせ侍うをるもーふをんのをうれなんの侍へけ
るふをうまとてるやうふ侍れけ思くをを
よりうひきこうをすあすれいてまのひまふ

もををせ侍んをうをとてをうを侍をばを
内をよ侍かりををめませををふをんをを
侍へををうをものををせ侍めれけよりうひや
侍ふをんをとうををすをるをくいうるいと
をうーありて伝のあーの れををををうい
れば申れをとけをるををんのちいをくて
みうるをーよみれ侍をををるりををれひをれ
と思をんをうみをを紀うらくちををむくはをく
ををもてを れ侍りてをををををやをとを
うれ侍をこのあるうをてあるをけうめてをを

這本以　後光嚴院宸翰不遠一
字書寫功了

右清廿納言抱冊子原為一冊標題參〻半面十一行書之
今分上下加點自且文章之中雖有可疑者以謂
後光嚴院宸翰不違一字書寫不敢改之如假名遣亦偏任本
畢

羣書類從卷第四百七十九下